

「つながる食育推進事業」に関する調査研究報告書

令和2年3月

文部科学省 初等中等教育局 健康教育・食育課

< 目次 >

I 総括	1
1. 調査研究の概要	3
1.1 調査研究の趣旨及び目的	3
1.2 調査研究の進め方	3
2. 取組の効果	7
2.1 効果検証の概要	7
2.2 効果検証の詳細	8
3. 普及啓発の方策検討	16
3.1 課題解決のための取組詳細	18
3.2 連携に関する取組詳細	37
3.3 栄養教諭の役割・工夫	45
4. おわりに	49
4.1 「つながる食育推進事業」による効果	49
4.2 普及方策の検討	49
4.3 その他	50
II 資料編	51
1. 実施校における取組	53
1.1 実施校の取組概要	53
1.2 実施校の取組一覧	66
1.3 栄養教諭アンケート	114
2. 実施校へのヒアリング調査	174
2.1 ヒアリング調査設計	174
2.2 朝食摂取について	180
2.3 ヒアリング結果詳細	189
3. 事前・事後アンケート	231
3.1 調査設計	231
3.2 結果の概要	232
3.3 結果詳細	235
4. 調査票	260
4.1 事前・事後アンケート	260
4.2 栄養教諭アンケート(第1回)	266
4.3 栄養教諭アンケート(第2回)	275

I 総括

1. 調査研究の概要

1.1 調査研究の趣旨及び目的

これまで学校の食育は、平成 17 年度の栄養教諭の制度化、平成 20 年度の学校給食法の改正による食育推進の方針の明確化等、法制度の整備の下に進められている。その流れに伴い、各校への栄養教諭の配置が進んでおり、平成 29 年 3 月には栄養教諭のあり方をまとめた「栄養教諭を中核としたこれからの学校の食育」が作成され、学校現場での利活用が進められている。また、平成 31 年 3 月には学習指導要領の改訂や社会の大きな変化に伴う子供の食を取り巻く状況の変化等を踏まえ、食に関する指導を行うための教職員向けの指導書である「食に関する指導の手引」が改訂されている。さらに、食育の効率的な推進にあたっては、栄養教諭だけに食育推進の役割を任せるのではなく、その他の教職員、家庭や地域等多様な主体が食育への共通理解のもと連携・協力して取組を進めることが重要とされている。

平成 29 年度及び 30 年度には、「つながる食育推進事業」（平成 29 年度 17 校、平成 30 年度 13 校）が実施されている。また、それらの取組の成果を検証し、実効性のある取組を全国へ普及することを目的とした「つながる食育推進事業」に関する調査研究も実施され、調査報告書のほかリーフレットが公開されている。

食育における家庭の役割は重要であるものの、社会環境やライフスタイルの変化に伴い、家庭で食に関する作法や正しい食生活を実践することが難しくなっている。このため、児童生徒を介して食育活動を学校と家庭の両輪で進めていけるように、取組を行っていくことが必要であると考え、令和元年度の「つながる食育推進事業」の実施校を対象に、本調査研究を実施する。

1.2 調査研究の進め方

本調査研究の実施概要・フローは下表のとおり。

図表 1-1 本調査研究の実施概要

調査方法	調査概要
①実施校の取組概要調査	モデル事業の受託機関である都道府県教育委員会から提出された事業計画書をもとに、モデル事業の実施体制や連携機関等を整理するとともに、本年度のモデル事業における各実施校の取組内容を把握・整理した。
②栄養教諭アンケート	実施校での取組内容及び栄養教諭から見た実施校の実情を把握するため、栄養教諭を対象としたアンケートを行った。
③実施校へのヒアリング	本年度の実施校（全 21 校）から 11 校に絞り込んで現地ヒアリングを行い、栄養教諭から取組実施のきっかけ、取組での工夫、効果、課題、連携状況等を詳細に把握した。
④事前・事後アンケート	実施校（全 21 校）における食育推進の取組とその効果について、定量的に検証を行うとともに、実効性のある取組を全国に普及させる方策等の検討を行うため、実施校の児童生徒・保護者及び教師を対象とした事前・事後アンケートを行った。
⑤有識者ヒアリング	ヒアリング校選定、効果検証、全国への普及方策について、より深く意見聴取を行うため、有識者へのヒアリングを複数回実施した。

<アンケート>

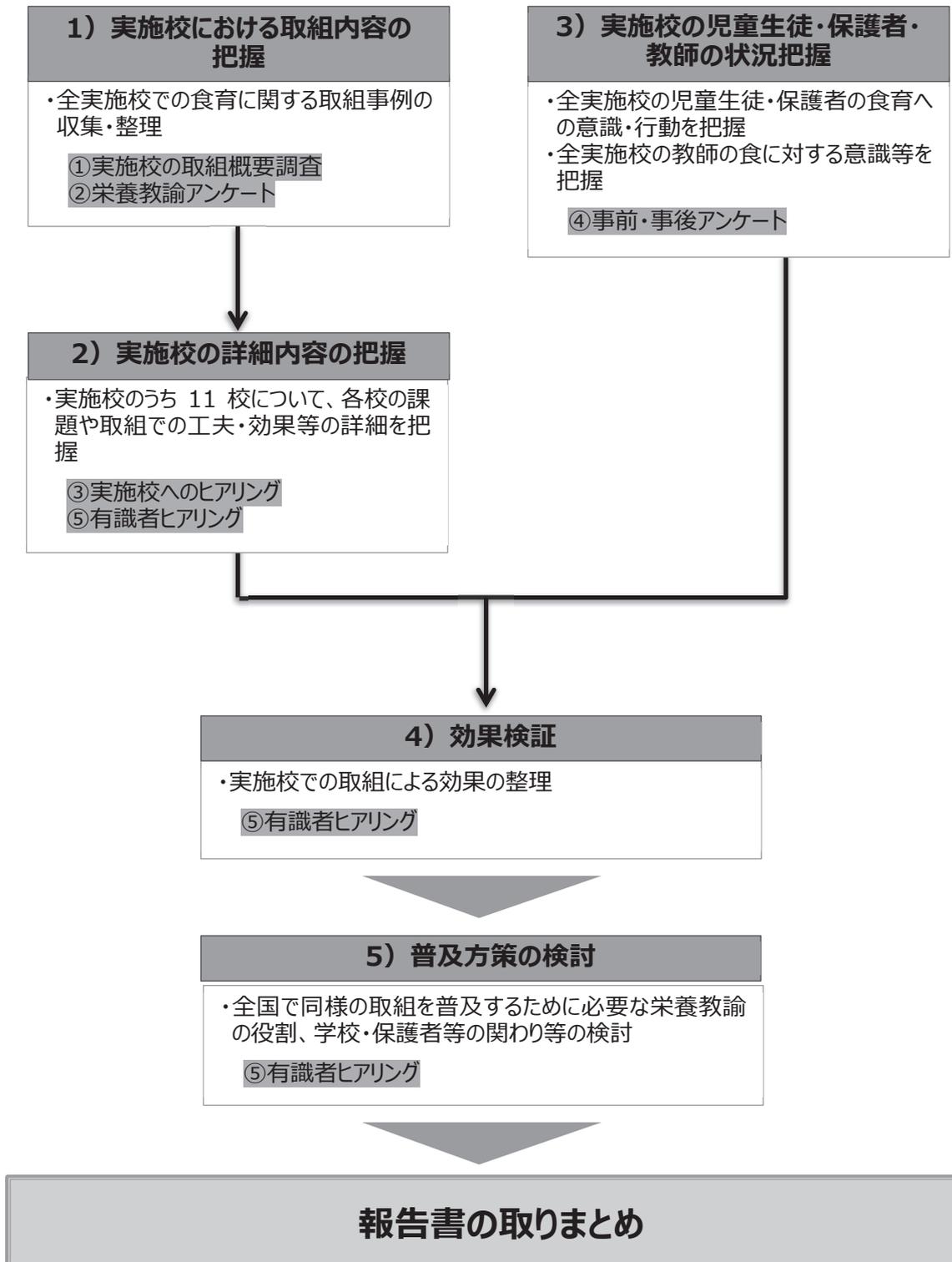
調査対象	主な調査項目	調査実施時期・実施方法	回収状況
栄養教諭アンケート	<p><第1回></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 昨年度までの貴校の食育に関する状況や課題 ● 貴校で把握している給食に関するデータ ● 食に関する指導や食育活動において使用している教材 ● 貴校における朝食摂取・欠食の状況 ● 朝食摂取についての取組内容や変化、情報共有 ● 本年度の「つながる食育推進事業」に関する取組内容 ● 独自の評価指標の設定 ● 貴校における食に対する理解、望ましい食習慣の形成、健康状態の改善 ● 取組における配慮や工夫 ● 児童生徒や保護者、地域等にみられる変化 <p><第2回></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 本年度「つながる食育推進事業」に関する取組の成果 ● 児童生徒や家庭、地域等との連携において特にポイントと感じている点 ● 児童生徒の朝食摂取の意識 ● 貴校における食に対する理解、望ましい食習慣の形成、健康状態の改善 ● 児童生徒や保護者、地域等にみられた変化 	<p>第1回：令和元年10月31日～11月8日 第2回：令和2年1月7日～1月17日 電子ファイル(M S E x c e l)調査票の電子メール送付・回収</p>	<p>100% (全21校) ※第1回・第2回とも</p>
事前・事後アンケート(児童生徒)	<ul style="list-style-type: none"> ● 食に関する意識 ● 伝統的な食文化・行事食への関心 ● 朝食の摂取 ● 共食の回数 ● 栄養バランスを考えた食事をとっている頻度 	<p>事前：令和元年6月 事後：令和2年1月 学校配布・学校回収</p>	<p>事前：7,309人 事後：7,254人</p>
事前・事後アンケート(保護者)	<ul style="list-style-type: none"> ● 子供の食に関する意識 ● 子供の伝統的な食文化・行事食への関心 ● 子供の朝食の摂取 ● 子供の共食の回数 ● 子供の栄養バランスを考えた食事をとっている頻度 	<p>事前：令和元年6月 事後：令和2年1月 学校配布・学校回収</p>	<p>事前：6,633人 事後：6,448人</p>
事前・事後アンケート(教師)	<ul style="list-style-type: none"> ● 給食時間・教科・個別指導等の食に関する指導 ● 栄養・衛生面での給食管理 ● 食に関する指導や給食管理における連携・調整 	<p>事前：令和元年6月 事後：令和2年1月 学校配布・学校回収</p>	<p>事前：604人 事後：671人</p>

石川県中能登町立中能登中学校

<ヒアリング>

分類	実施先	実施日
実施校	北海道帯広市立大空中学校	令和元年12月24日
	山形県山形市立桜田小学校	令和元年12月17日
	石川県中能登町立中能登中学校	令和元年12月12日
	石川県七尾市立七尾東部中学校	令和元年12月13日
	長野県須坂市立東中学校	令和2年1月8日
	静岡県裾野市立東小学校	令和元年12月23日
	三重県立松阪あゆみ特別支援学校	令和2年1月9日
	三重県立聾学校	令和2年1月9日
	奈良県橿原市立橿原中学校	令和2年1月8日
	山口県宇部市立琴芝小学校	令和2年1月20日
	山口県宇部市立船木小学校	令和2年1月21日
有識者	お茶の水女子大学基幹研究院自然科学系 教授 赤松利恵氏	令和元年9月2日
		令和元年11月19日
		令和2年2月10日

図表 1-2 本調査研究のフロー



2. 取組の効果

2.1 効果検証の概要

ここでは、児童生徒アンケートの事前アンケート・事後アンケートでの比較を中心に、本事業における取組の効果を検証した。

まず、事前アンケート・事後アンケートにおける児童生徒の食に関する意識に関する各項目（栄養バランス、咀嚼、食事マナー、伝統的な食文化や行事食）に関連する取組を、すべての学年を対象に行った学校・特定の学年又はその他の児童生徒を対象に行った学校・取組を行っていない学校に分類し、取組度合いによって児童生徒の食に関する意識の変化に差があるかを分析した。その結果いずれの項目でも、すべての学年の児童生徒を対象に取組を行った学校においては、児童生徒の食に関する意識が高い傾向がみられた。

また、児童生徒の食習慣の改善がみられた学校とそうでない学校に分類し、改善の有無で食に関する意識に差があるかを分析したところ、食習慣の改善がみられた学校では、食に関する意識についても取組前と比べ、取組後に改善がみられる傾向があった。

さらに、教師を対象とした事後アンケートの結果を得点化して学校ごとに分類したところ、教師アンケートで得点が高い学校で児童生徒の食に関する意識が高く、食習慣もよい傾向にあり、さらに取組後に改善がみられる項目が多かった。

最後に、児童生徒の食に関する意識と食習慣（朝食摂取、共食、主食・主菜・副菜をそろえた食事）との関連を分析したところ、意識がとて高い児童生徒では望ましい食習慣が形成されており、さらにいずれの項目においても取組後に改善がみられた。

以上の分析より、実施校における取組が一定の効果を生んでいる結果が確認でき、以下の4点が重要と考えられる。

- 児童生徒に対し食に関する課題を意識して取組を行うことで、普段の行動に結び付きやすいこと
- 児童生徒の食習慣の改善と児童生徒の食に関する意識の改善には関連性があり、食に関する意識と食習慣の両方について児童生徒に働きかけていくこと
- 食育に対する教師の意識や行動が充実していることが、児童生徒の食に関する意識や食習慣によい影響を与えること
- 児童生徒個人の食に関する意識と食習慣にも関連性があること

2.2 効果検証の詳細

(1) 取組状況による分析

ここでは、実施校（全 21 校）の取組に着目し、取組状況で児童生徒の食に関する意識に違いがあるか分析した。なお、取組の状況の整理にあたっては、実施校へ追加アンケートを実施し、その結果から整理した。

① 食に関する意識

● 一日や一週間の栄養バランスを考えて食事やおやつをとるか

一日や一週間の栄養バランスを考えて食事やおやつをとるかについて、「はい」と「どちらかといえばはい」の合計は、事前アンケート・事後アンケートとも、すべての学年の児童生徒を対象に取組を行った学校と、特定の学年の児童生徒を対象に取組を行った学校では、約7割となっているが、取組を行っていない学校では、6割以下と低くなっている。

図表 2-1 一日や一週間の栄養バランスを考えて食事やおやつをとるか(単一回答)／取組状況別

		はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいいえ	いいえ	無回答	(%)
TOTAL (n=14563)		30.0	39.6	20.1	10.0	0.3	
すべての学年の児童生徒を対象に取組を行った学校	事前 (n=3810)	32.8	37.8	20.3	8.9	0.2	
	事後 (n=3797)	31.3	40.5	19.3	8.5	0.4	
特定の学年の児童生徒を対象に取組を行った学校	事前 (n=2843)	28.7	40.3	19.9	10.8	0.2	
	事後 (n=2819)	30.1	40.8	19.6	9.4	0.1	
取組を行っていない学校	事前 (n=656)	20.9	38.4	23.9	16.3	0.5	
	事後 (n=638)	20.8	36.7	23.0	18.8	0.6	

● ゆっくりよくかんで食べるか

ゆっくりよくかんで食べるかについて、「はい」の割合は、事後アンケートでみると、すべての学年の児童生徒を対象に取組を行った学校では40.7%と、ほかの学校よりも高くなっている。

図表 2-2 ゆっくりよくかんで食べるか(単一回答)／取組状況別

		はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいいえ	いいえ	無回答	(%)
TOTAL (n=14563)		38.4	38.3	17.5	5.4	0.3	
すべての学年の児童生徒を対象に取組を行った学校	事前 (n=5253)	38.7	38.0	17.5	5.6	0.3	
	事後 (n=5210)	40.7	37.7	16.4	4.9	0.3	
特定の学年の児童生徒を対象に取組を行った学校	事前 (n=769)	37.5	36.8	18.1	7.4	0.3	
	事後 (n=735)	36.3	39.5	17.8	6.1	0.3	
その他の児童生徒を対象に取組を行った学校	事前 (n=583)	37.7	40.7	16.8	4.8	0.0	
	事後 (n=630)	34.1	37.8	20.5	7.0	0.6	
取組を行っていない学校	事前 (n=704)	32.8	41.5	20.6	5.0	0.1	
	事後 (n=679)	33.1	42.1	19.6	5.0	0.1	

● 食事マナーに気をつけているか

食事マナーに気をつけているかについて、「はい」と「どちらかといえばはい」の合計は、事前アンケート・事後アンケートとも、すべての学年の児童生徒を対象に取組を行った学校と、特定の学年の児童生徒を対象に取組を行った学校では、8割以上と高くなっているが、取組を行っていない学校では約5割と低くなっている。

図表 2-3 食事マナーに気をつけているか(単一回答)／取組状況別

		はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいいえ	いいえ	無回答	(%)
TOTAL (n=14563)		52.3			35.5	9.4 2.6	0.2
すべての学年の児童生徒を対象に取組を行った学校	事前 (n=6828)	52.0			35.8	9.4 2.6	0.2
	事後 (n=6810)	53.2			35.3	8.9 2.3	0.2
特定の学年の児童生徒を対象に取組を行った学校	事前 (n=408)	50.5			34.1	12.0 2.9	0.5
	事後 (n=380)	53.4			37.4	6.6 2.1	0.5
取組を行っていない学校	事前 (n=73)	27.4	20.5		37.0	15.1	0.0
	事後 (n=64)	23.4	29.7		32.8	14.1	0.0

● 伝統的な食文化や行事食についての関心

伝統的な食文化や行事食についての関心について、「はい」の割合は、事後アンケートでみると、すべての学年の児童生徒を対象に取組を行った学校では 30.1%と、ほかの学校よりも高くなっている。

図表 2-4 伝統的な食文化や行事食についての関心(単一回答)／取組状況別

		はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいいえ	いいえ	無回答	(%)
TOTAL (n=14563)		28.9			31.9	23.1 12.6 3.6	
すべての学年の児童生徒を対象に取組を行った学校	事前 (n=5192)	29.8			31.8	22.5 11.4 4.5	
	事後 (n=5122)	30.1			32.7	23.3 10.3 3.7	
特定の学年の児童生徒を対象に取組を行った学校	事前 (n=1314)	25.1			30.2	24.4 18.7	1.5
	事後 (n=1313)	25.2			29.3	24.8 18.7	1.9
その他の児童生徒を対象に取組を行った学校	事前 (n=656)	31.1			32.3	18.9 14.0 3.7	
	事後 (n=694)	26.2			31.4	24.1 14.7 3.6	
取組を行っていない学校	事前 (n=147)	29.9			29.3	23.8 14.3	2.7
	事後 (n=125)	20.0			46.4	23.2 9.6	0.8

(2) 食習慣の改善状況による分析

ここでは、実施校（全 21 校）の事前アンケート・事後アンケートの児童生徒の食習慣に着目し、食習慣の改善の有無による意識の変化について分析した。なお、食習慣の改善の有無については、事前アンケート・事後アンケートの食習慣の4項目「朝食を食べる頻度」「一緒に生活する人と一緒に朝食を食べる頻度」「一緒に生活する人と一緒に夕食を食べる頻度」「主食、主菜、副菜をそろえた食事が1日に2回以上ある頻度」について、「ほとんど毎日」を4点、「週に4～5日」を3点、「週に2～3日」を2点、「週に1日程度」を1点、「ほとんどない」を0点として、それぞれ平均値を算出し、事前アンケートに比べて事後アンケートで平均値が改善したかどうかを整理した。

① 食に関する意識

● 一日や一週間の栄養バランスを考えて食事やおやつをとるか

一日や一週間の栄養バランスを考えて食事やおやつをとるかについて、「はい」と「どちらかといえばはい」の合計は、事前アンケートと事後アンケートを比較すると、食習慣の改善がみられた学校では、事後アンケートのほうが2.8ポイント高くなっている。

図表 2-5 一日や一週間の栄養バランスを考えて食事やおやつをとるか(単一回答)／食習慣の改善の有無別

						(%)
		はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいい	いいえ	無回答
TOTAL (n=14563)		30.0	39.6	20.1	10.0	0.3
食習慣の改善が みられた学校	事前 (n=2148)	29.4	39.9	20.8	9.7	0.3
	事後 (n=2099)	30.3	41.8	21.4	6.3	0.1
食習慣の改善が みられなかった学校	事前 (n=5161)	30.4	38.4	20.4	10.6	0.2
	事後 (n=5155)	29.8	39.7	19.1	11.2	0.3

● ゆっくりよくかんで食べるか

ゆっくりよくかんで食べるかについて、「はい」と「どちらかといえばはい」の合計は、事前アンケートと事後アンケートを比較すると、食習慣の改善がみられた学校では、事後アンケートのほうが2.5ポイント高くなっている。

図表 2-6 ゆっくりよくかんで食べるか(単一回答)／食習慣の改善の有無別

						(%)
		はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいい	いいえ	無回答
TOTAL (n=14563)		38.4	38.3	17.5	5.4	0.3
食習慣の改善が みられた学校	事前 (n=2148)	39.0	38.9	17.1	4.8	0.2
	事後 (n=2099)	39.4	41.0	16.1	3.4	0.2
食習慣の改善が みられなかった学校	事前 (n=5161)	37.5	38.2	18.1	6.0	0.3
	事後 (n=5155)	38.8	37.2	17.7	6.0	0.4

● 食事マナーに気をつけているか

食事マナーに気をつけているかについて、「はい」と「どちらかといえばはい」の合計は、事前アンケートと事後アンケートを比較すると、食習慣の改善がみられた学校では、事後アンケートのほうが2.6ポイント高くなっている。

図表 2-7 食事マナーに気をつけているか(単一回答)／食習慣の改善の有無別

(%)

		はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいいえ	いいえ	無回答	
TOTAL (n=14563)		52.3			35.5	9.4 2.6	0.2
食習慣の改善が みられた学校	事前 (n=2148)	54.4			33.8	9.1 2.6	0.2
	事後 (n=2099)	56.3			34.5	7.3 1.7	0.2
食習慣の改善が みられなかった学校	事前 (n=5161)	50.6			36.3	10.1 2.8	0.2
	事後 (n=5155)	51.6			35.8	9.7 2.7	0.2

(3) 教師アンケートの得点別の分析

ここでは、実施校（全 21 校）の事後アンケートの教師アンケートの得点に着目して、得点の高さによる意識や行動の変化について分析した。なお、教師アンケートの得点の整理にあたっては、事後アンケートの 36 項目について、「できている」を 2 点、「概ねできている」を 1 点、「あまりできていない」を -1 点、「できていない」を -2 点として、得点を算出し、各学校の平均値が実施校全校の平均値よりも高いかどうかの 2 区分に整理した。

① 食に関する意識

● 一日や一週間の栄養バランスを考えて食事やおやつをとるか

一日や一週間の栄養バランスを考えて食事やおやつをとるかについて、「はい」と「どちらかといえばはい」の合計は、事前アンケートと事後アンケートを比較すると、教師アンケートの得点が高い学校では、事後アンケートのほうが1.9ポイント高くなっている。

図表 2-8 一日や一週間の栄養バランスを考えて食事やおやつをとるか(単一回答)／教師アンケートの得点別

(%)

		はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいいえ	いいえ	無回答	
TOTAL (n=14563)		30.0			39.6	20.1 10.0	0.3
教師アンケートの 得点が高い学校	事前 (n=3379)	30.7			39.2	19.7 10.3	0.2
	事後 (n=3267)	30.7			41.1	19.5 8.6	0.2
教師アンケートの 得点が高くない学校	事前 (n=3930)	29.6			38.5	21.2 10.3	0.3
	事後 (n=3987)	29.3			39.6	20.0 10.7	0.4

● ゆっくりよくかんで食べるか

ゆっくりよくかんで食べるかについて、「はい」と「どちらかといえばはい」の合計は、事前アンケートと事後アンケートを比較すると、教師アンケートの得点が高い学校では、事後アンケートのほうが2.2ポイント高くなっている。

図表 2-9 ゆっくりよくかんで食べるか(単一回答)／教師アンケートの得点別

		はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいいえ	いいえ	無回答	(%)
TOTAL (n=14563)		38.4	38.3	17.5	5.4	0.3	
教師アンケートの 得点が高い学校	事前 (n=3379)	38.4	39.2	16.8	5.3	0.3	
	事後 (n=3267)	40.2	39.6	15.7	4.2	0.2	
教師アンケートの 得点が高い学校	事前 (n=3930)	37.5	37.7	18.6	6.0	0.2	
	事後 (n=3987)	38.0	37.2	18.4	6.0	0.4	

● 食事の際に衛生的な行動をとるか

食事の際に衛生的な行動をとるかについて、「はい」の割合は、事前アンケートと事後アンケートを比較すると、教師アンケートの得点が高い学校では、事後アンケートのほうが1.8ポイント高くなっている。

図表 2-10 食事の際に衛生的な行動をとるか(単一回答)／教師アンケートの得点別

		はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいいえ	いいえ	無回答	(%)
TOTAL (n=14563)		57.3	32.4	7.6	2.5	0.3	
教師アンケートの 得点が高い学校	事前 (n=3379)	58.3	31.8	7.0	2.7	0.1	
	事後 (n=3267)	60.1	31.0	6.2	2.4	0.4	
教師アンケートの 得点が高い学校	事前 (n=3930)	55.5	33.0	8.9	2.4	0.2	
	事後 (n=3987)	55.9	33.3	7.9	2.6	0.4	

● 食事マナーに気をつけているか

食事マナーに気をつけているかについて、「はい」と「どちらかといえばはい」の合計は、事前アンケートと事後アンケートを比較すると、教師アンケートの得点が高い学校では、事後アンケートのほうが2.3ポイント高くなっている。

図表 2-11 食事マナーに気をつけているか(単一回答)／教師アンケートの得点別

		はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいいえ	いいえ	無回答	(%)
TOTAL (n=14563)		52.3	35.5	9.4	2.6	0.2	
教師アンケートの 得点が高い学校	事前 (n=3379)	53.3	34.2	9.5	2.8	0.1	
	事後 (n=3267)	55.2	34.6	7.9	2.1	0.2	
教師アンケートの 得点が高い学校	事前 (n=3930)	50.3	36.7	10.1	2.7	0.2	
	事後 (n=3987)	51.1	36.0	9.9	2.6	0.3	

② 食習慣について

● 朝食を食べる頻度

朝食を食べる頻度について、「ほとんど毎日」の割合は、事前アンケート・事後アンケートとも、教師アンケートの得点が高い学校では約9割であるのに対して、教師アンケートの得点が高い学校では9割弱と、教師アンケートの得点が高い学校に比べて1.8～2.6ポイント低くなっている。

図表 2-12 朝食を食べる頻度(単一回答)／教師アンケートの得点別

		ほとんど毎日	週に4～5日	週に2～3日	週に1日程度	ほとんどない	無回答		
TOTAL (n=14563)			88.7			4.8 2.4	0.7 1.7	1.6	
教師アンケートの 得点が高い学校	事前 (n=3379)		90.0			4.6 2.0	0.7 1.3	1.5	
	事後 (n=3267)		89.9			4.6 2.3	0.6 1.7	0.9	
教師アンケートの 得点が高い学校	事前 (n=3930)		88.2			4.6 2.8	0.8 1.7	2.0	
	事後 (n=3987)		87.3			5.3 2.5	1.0 2.0	1.9	

(4) 児童生徒アンケートから見える意識と行動の変化

食習慣に関する設問について、食に関する意識がどの程度関連があるか分析を行った。

ここでは、事前アンケート・事後アンケートそれぞれにおいて、食に関する意識について聴取している5項目に対する回答の組み合わせから、食に関する意識を4つに分類した。

図表 2-13 食に関する意識の4区分

分類	アンケートの回答結果
意識がとても高い（設問1～設問5の5項目すべて1）	● 食に関する意識5項目すべてで、「はい」と回答
意識が高い（5項目すべて1か2）	● 食に関する意識5項目すべてで、「はい」又は「どちらかといえばはい」と回答
意識がやや高い（3～4項目が1か2）	● 食に関する意識5項目のうち、「はい」又は「どちらかといえばはい」と回答した項目が3～4項目
意識が高くない（1か2が2項目以下）	● 食に関する意識5項目のうち、「はい」又は「どちらかといえばはい」と回答した項目が2項目以下

● 朝食を食べる頻度

朝食を食べる頻度について、食に関する意識別でみると、「ほとんど毎日」の割合は、事前アンケート・事後アンケートとも「意識がとて高い」「意識が高い」人は9割以上と高くなっているが、「意識がやや高い」「意識が高くない」人では、9割以下となっている。

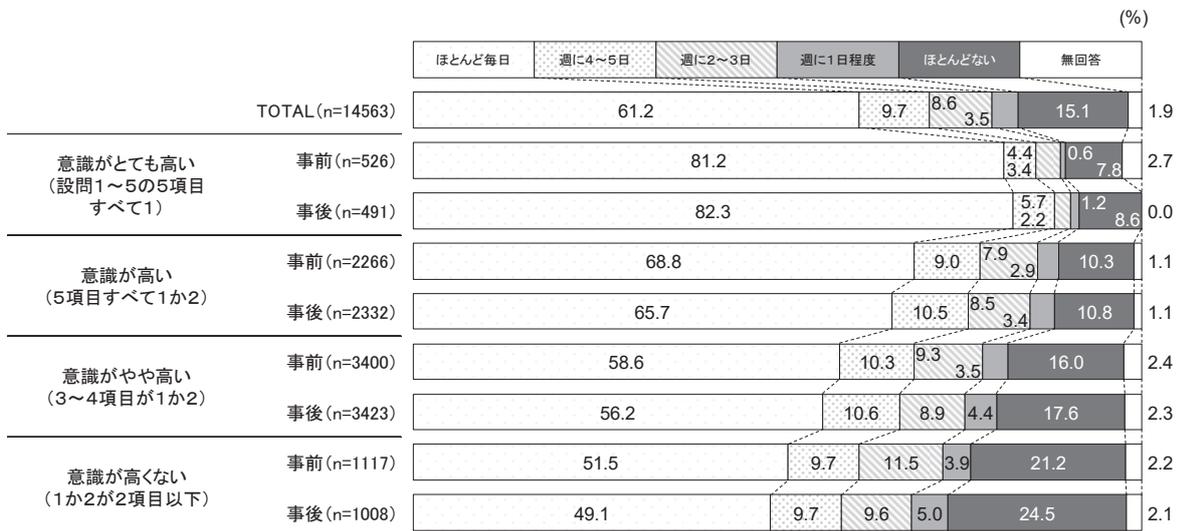
図表 2-14 朝食を食べる頻度(単一回答)／食に関する意識別



● 一緒に生活する人と一緒に朝食を食べる頻度

一緒に生活する人と一緒に朝食を食べる頻度について、食に関する意識別でみると、「ほとんど毎日」の割合は、事前アンケート・事後アンケートとも「意識がとて高い」人は8割以上と高くなっているが、意識が低くなるにつれて一緒に朝食を食べる頻度も低くなっている。

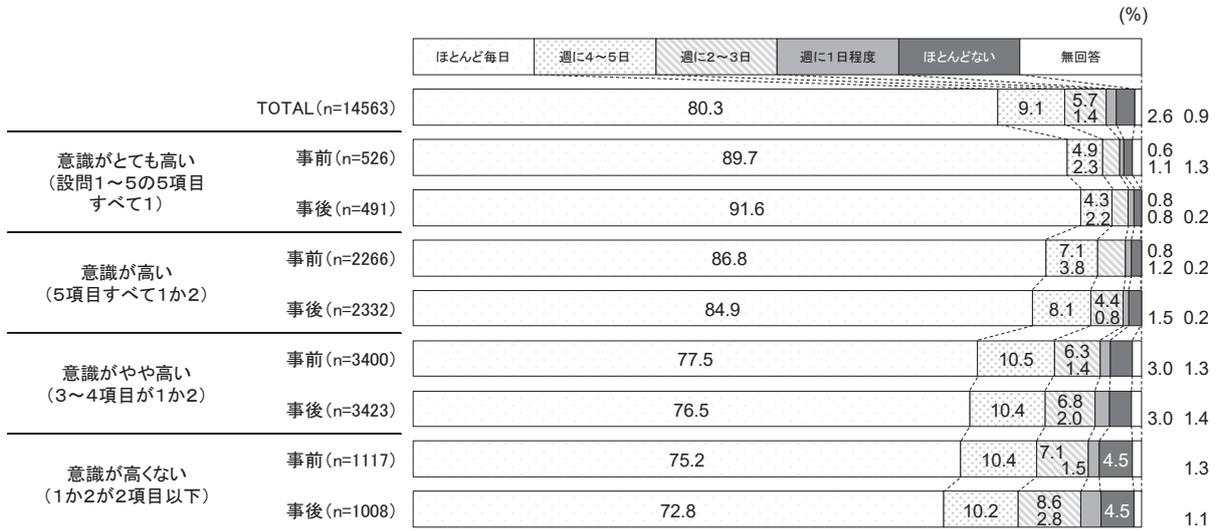
図表 2-15 一緒に生活する人と一緒に朝食を食べる頻度(単一回答)／食に関する意識別



● 一緒に生活する人と一緒に夕食を食べる頻度

一緒に生活する人と一緒に夕食を食べる頻度について、食に関する意識別でみると、「ほとんど毎日」の割合は、事前アンケート・事後アンケートとも「意識がとて高い」「意識が高い」人は8割以上と高くなっているが、「意識がやや高い」「意識が高くない」人では8割以下となっている。

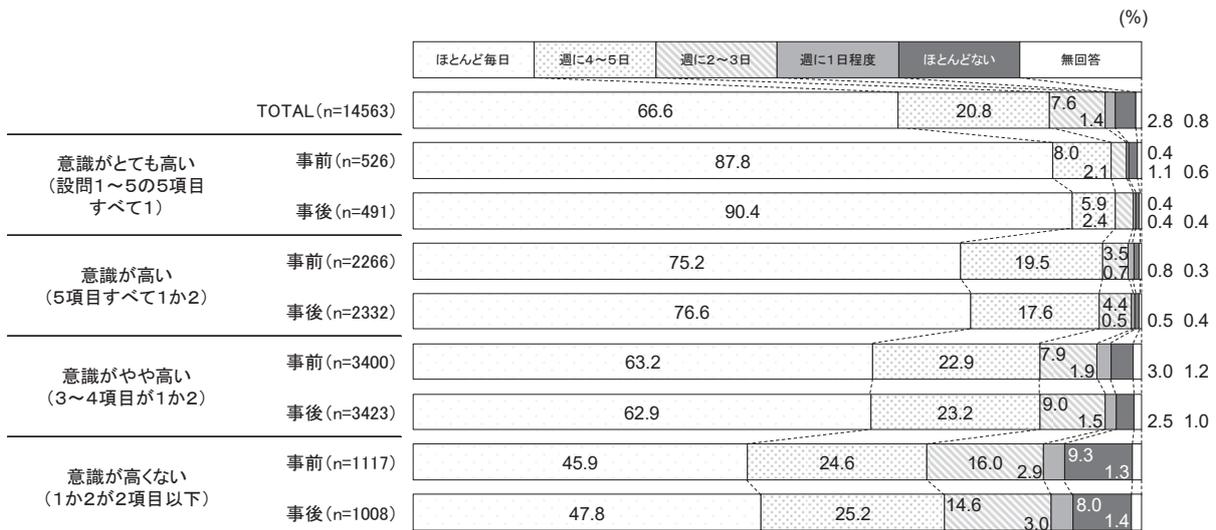
図表 2-16 一緒に生活する人と一緒に夕食を食べる頻度(単一回答)／食に関する意識別



● 主食、主菜、副菜をそろえた食事が1日に2回以上ある頻度

主食、主菜、副菜をそろえた食事が1日に2回以上ある頻度について、食に関する意識別でみると、「ほとんど毎日」の割合は、事前アンケート・事後アンケートとも「意識がとて高い」人は約9割と高くなっているが、「意識が高くない」人は5割以下と低くなっている。

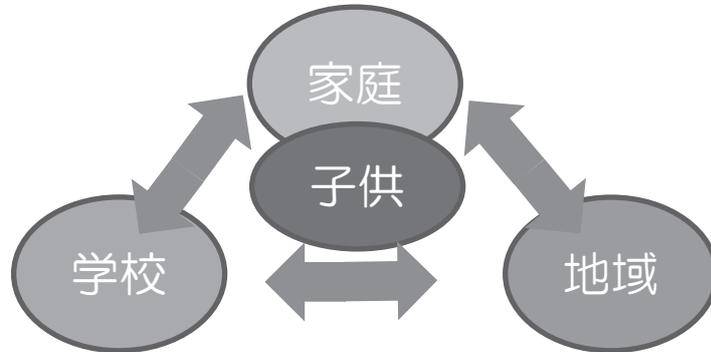
図表 2-17 主食、主菜、副菜をそろえた食事が1日に2回以上ある頻度(単一回答)／食に関する意識別



3. 普及啓発の方策検討

「つながる食育」の取組を普及啓発させるためには、子供にとって生活の主たる場である学校・家庭・地域が一体となって、子供を支えることで、子供自身の意識・行動の変容を促すことが重要である。

図表 3-1 学校・家庭・地域が一体となって子供を支えるイメージ図



また、取組を進めていく際には、PDCAサイクルを意識しながら、以下の7点のポイントに留意することが重要である。

- 「つながる食育推進事業」の2つの目的（食に関する自己管理能力の育成、栄養教諭の資質向上）に基づいた企画設計
- 実態等を踏まえた目標や評価指標の設定
- 教科等横断的な視点でのカリキュラム・マネジメント
- 行政・校内推進体制の確立と家庭・地域等との連携
- 栄養教諭を中核とした全校体制による指導・評価
- 取組の前後を数値で評価する
- 体験活動と学びを関連させる

事業を始める際には、まず自校の課題を把握し、家庭や地域との連携を事業のキーワードとして取組内容を検討し、取組においては体験するだけでなく、いかに学びに結び付けていくか、学級担任や栄養教諭が工夫する必要がある。また、栄養教諭を中核とした全校体制を構築することで、栄養教諭自身の資質が向上するほか、校内で食育を推進する気運醸成にもつながることが期待される。

本章では、今年度の「つながる食育推進事業」の実施校を対象に実施した栄養教諭アンケートから、「昨年度までの食育に関する状況や課題等」（栄養教諭アンケート（第1回）問1）での回答結果をもとに、具体的な取組事例を紹介することで、全国への普及方策として整理する。

栄養教諭アンケート（第1回）の結果から、

- 食事マナーが身に付いていない子供が多い
- 伝統的な食文化や行事食に対する関心が低い
- 栄養バランスのよい食事がとれていない子供が増えている

といった内容が共通の課題として挙げられる。

また、上記以外にも、実施校へのヒアリング等を通して、

- 朝食欠食率が相対的に高い

も各学校で日々の健康に影響を及ぼす課題としてとらえられていることが多くみられた。

3.1 課題解決のための取組詳細

ここでは、前述の4つの課題について取り組んでいた代表的な事例を紹介する。ヒアリングにおいて特に効果がみられた学校のほか、事前・事後アンケートの結果から取組によって効果がみられた学校を取り上げている。事前・事後アンケートの結果から効果がみられた学校の中には、これらの分類での取組を意識していない場合もある点には留意が必要である。

これらの学校の取組内容の詳細をもとに、自校の状況に応じた取組内容を検討することが求められる。

図表 3-3 全国への普及方策で取り上げる事例

分類	学校名
朝食摂取	<ul style="list-style-type: none"> ● 山形県山形市立東小学校 ● 石川県中能登町立中能登中学校 ● 長野県須坂市立東中学校
栄養バランスを考えた食事	<ul style="list-style-type: none"> ● 山口県宇部市立琴芝小学校 ● 石川県七尾市立七尾東部中学校
食事マナー	<ul style="list-style-type: none"> ● 北海道帯広市立栄小学校 ● 山形県山形市立桜田小学校 ● 三重県立聾学校
地域との連携	<ul style="list-style-type: none"> ● 静岡県裾野市立東小学校 ● 北海道帯広市立大空中学校

(1) 朝食摂取に関する取組

① 課題認識

本事業実施前の児童生徒の課題として、「朝食欠食率が相対的に高い（改善しない・県平均より悪い等）」という点は、21校中9校が課題と感じており、また全国的に朝食摂取の重要性が叫ばれているなか、非常に重要な取組と考えられる。

また、栄養教諭アンケートの結果から、朝食摂取を重要と思っている割合は、児童生徒で、第1回5校に対し、第2回で13校と倍増しており、朝食摂取についての取組を行うことで、児童生徒に朝食摂取の重要性を理解してもらうことができていると考えられる。

朝食摂取は、児童生徒自身の意識の変化のみで改善することが難しく、家庭・保護者の協力が不可欠である。昨今、保護者の働き方が多様になってきており、朝食を子供と一緒に食べることが難しい家庭も増えている。そういった中でも、子供が朝食を食べられるよう準備をしたり、栄養バランスに配慮したりすることが保護者には求められる。

家庭への働きかけは、学校からの配布物を介して行うことが多いため、ただ読むだけでなく、保護者から児童生徒へのフィードバックを行うような工夫をすることも必要である。

② 事前・事後アンケートからみえる効果

朝食摂取については、事前・事後アンケートとも9割弱となっており、ほぼすべての学校で大半の児童生徒が朝食を食べていることが分かる。ただし、中には、事前アンケートよりも事後アンケートのほうが朝食をほとんど毎日食べる割合が減っている学校もあり、取組による成果を朝食摂取の頻度のみではかるには限界があるものと考えられる。

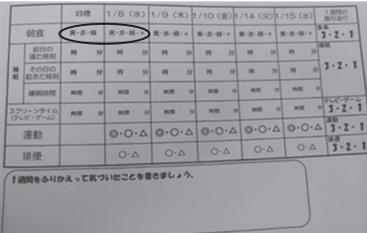
図表 3-4 朝食を食べる頻度(単一回答)／学年別



③ 各学校での取組事例

ここでは、ヒアリング調査結果及び事前・事後アンケート結果から特に改善がみられた学校を中心に、朝食摂取の取組を行っている事例について紹介する。

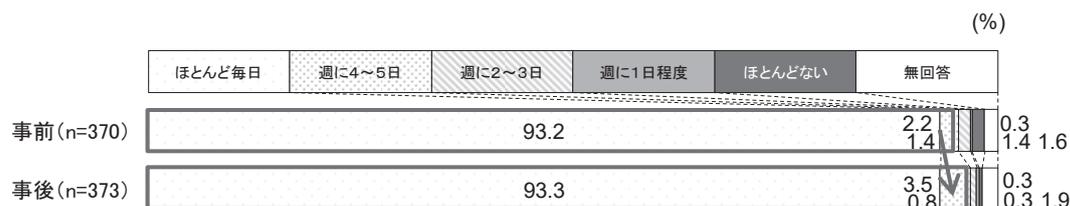
ア. 山形県山形市立東小学校

分類	概要
現状・課題	毎年6～7月に食生活に関する学校独自のアンケートを実施している。昨年度から朝食の内容（主食・主菜・副菜・汁物）も含めて調査したところ、朝食欠食に加え、「主食のみ」という児童が約2割に上った。
目標	家庭と連携した取組を通して、朝食摂取率の向上と栄養バランスの改善を目指す。
主な指標	朝食を食べる児童の割合 栄養バランスを考えて食事やおやつをとる児童の割合
取組内容	<p>◆「元気いっぱい充電カード」を使った意識付け</p> <p>毎年、長期休業明けの9月と1月にそれぞれ一週間ずつ、全学年を対象に、生活習慣を見直すための「元気いっぱい充電カード」の記入を実施している。これまで朝食については3段階（◎主食とおかず、○主食のみ、△食べなかった）で記入していたが、今年度は新たに「黄・赤・緑」の食品を食べたか確認するようにした。</p>  <p>◎主食とおかず、○主食のみ、△食べなかった</p> <p>黄・赤・緑の食品を食べたか確認するようにした。</p> <p>◆5年生は「味噌汁作り」、6年生は「朝食作り」を家庭で実践</p> <p>高学年では家庭科の時間の学びを家庭で実践する取組を実施。5年生は夏休みに「味噌汁作り」、6年生は夏・冬休み等数回にわたって「朝食作り」の課題に取り組んだ。児童は、自分で作ることができた喜びよりも、家族が喜んで食べてくれたことが嬉しいと感じたり、作り手の苦労を実感し感謝の気持ちを抱いたりした。</p> <p>また、朝食の重要性についての理解が深まっただけでなく、卵を割れなかった児童がバランスのよい朝食を作ろうとするまでに成長する等、調理への意欲や調理技術等も向上した。</p>
効果	児童は「主食だけでは不十分だ」ということが分かり、おかずを食べることに意識が向くようになった。取組に協力した保護者も、単に朝食を食べる・食べないだけでなく、何を食べさせたらよいのかという意識が出てきた。取組後のアンケートでは朝食を週に4日以上食べる児童、栄養バランスを考えて食事やおやつをとる児童の割合が増加した。
今後の課題	生活リズムについて注視していく必要がある。テレビやゲーム等で夜更かしをした結果、睡眠時間が短くなりがちな児童がおり、起床時間の遅れが朝食欠食につながるためである。また、子供の孤食が朝食欠食の要因にもなり得る。共働き等で難しいケースもあるが、保護者へ共食への意識付けを行い、できる限り一緒に食べてもらえるよう協力を求めている。

分類	概要
取組における栄養教諭の工夫	主食・主菜・副菜・汁物がすべてそろった朝食はベストだが、忙しい日々の中で実践するのは困難。取組の中では、黄（主にエネルギーのもとになる）・赤（主に体をつくるもとになる）・緑（主に体の調子を整えるもとになる）の食品を汁物に入れるだけでも栄養バランスが改善するというヒントを示して、家庭での実践がしやすいように配慮した。

取組内容において紹介したアンケートは以下の項目となっており、朝食摂取率・栄養バランスへの意識のいずれにおいても改善している。

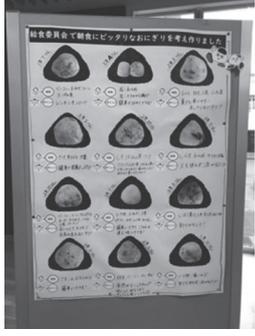
図表 3-5 【児童生徒】朝食を食べる頻度(単一回答)／山形市立東小学校における取組前後比較



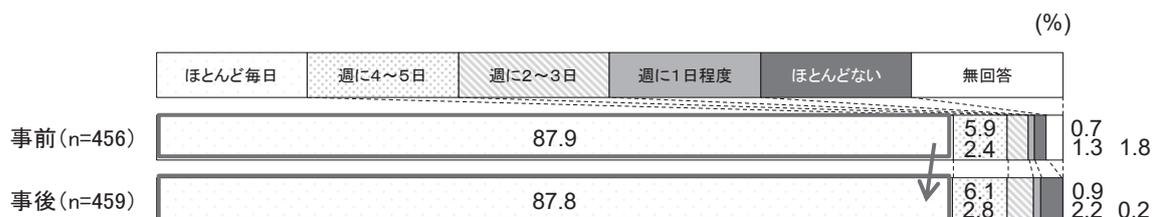
図表 3-6 【児童生徒】一日や一週間の栄養バランスを考えて食事やおやつをとるか(単一回答)／山形市立東小学校における取組前後比較



イ. 石川県中能登町立中能登中学校

分類	概要
現状・課題	朝食摂取率を毎年調査しているが、生徒の約1割は朝食をとる習慣がない。遠方から通学する生徒は朝の時間に余裕がないこと、就寝時間が遅い等の理由で食欲がないことが背景にあると考えられる。
目標	保護者が朝食を用意できない場合でも、自分で作って食べられるようになることを目指す。さらには、自分自身で朝食を食べる意義を理解し、家庭への働きかけができるようになることが望ましい。
主な指標	朝食を毎日食べる生徒の割合
取組内容	<p>◆給食委員を対象とした朝食作りの体験 夏休みの期間を利用し、1～3年生の給食委員（計15名）を対象として、朝食として食べられるおにぎりを作る取組を行った。給食委員の15名は、朝食摂取の習慣はあるものの、菓子パンやカップラーメン、シリアル等で済ませてしまうことが多かった。こうした栄養面の偏りを考慮し、おにぎりの具を考えるにあたっては「栄養があり、かつ簡単に調理できる」という点を意識することとした。</p> <p>◆掲示物や食育通信で発信 おにぎりの具は生徒自身が考え、卵、昆布、ゴマ、柴漬け、ミックスベジタブル、冷凍の唐揚げ等、生徒が一人でも作れる食材を取り入れた。この取組の内容については、掲示物や食育通信で発信した。実際に取組に参加した給食委員以外の生徒や保護者にも伝わりやすいよう、具材の作り方や具材選びのポイント、手軽さや栄養等の情報を盛り込んだ。食育通信は保護者と一緒に読むよう、生徒に促した。  < 玄関に設置した掲示物 ></p>
効果	生徒は講師を招いた講演会で多くの質問をする、またその内容を覚えている等、みな熱心に取り組んでおり、調理のしやすさや栄養バランス等についての理解が進んだ様子であった。ただ、行動の変化はまだ表れていない。
今後の課題	食に対する課題は、取組を行ってすぐ成果が出るものではないため、改善を行いつつ今年度の内容を継続していく必要がある。
取組における栄養教諭の工夫	「人と話す力」がなければやっていけないと感じる。学校内・学校外、さまざまな人と連絡を取り合わなければならない。講演会等の講師を探すにあたっては、給食関係者や栄養教諭、栄養士の人脈やSNSを駆使し、中学校での講演を依頼した。

図表 3-7 【児童生徒】朝食を食べる頻度(単一回答)／中能登町立中能登中学校における取組前後比較



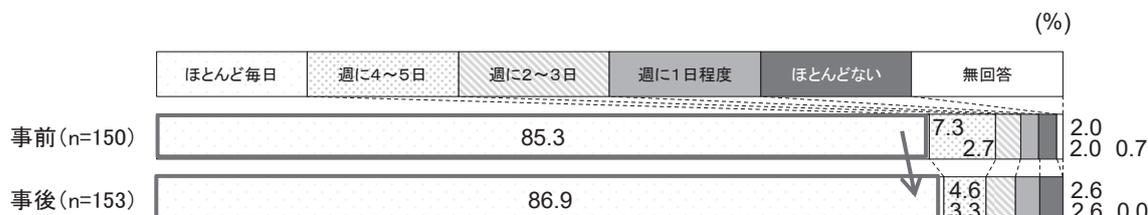
ウ. 長野県須坂市立東中学校

分類	概要
現状・課題	3世代同居の割合が高いこともあり、朝食をしっかりと食べている生徒は比較的多いものの、朝食や起床時刻・睡眠時間も含めた望ましい生活習慣を形成していく必要がある。
目標	自己管理能力を育成する。
主な指標	朝食を毎日食べる生徒の割合
取組内容	<p>◆「生活ノート」に起床時刻・睡眠時間・朝食摂取の有無を記録</p> <p>長野県の中学校では、生徒が毎日の授業の記録と日記を「生活ノート」に記入する。今年度から東中学校では、「生活ノート」に起床時刻と睡眠時間、朝食摂取の有無「食べた」「食べなかった」を記入する欄を追加した。自分の生活習慣を記入することで、自己管理を進め、意思決定後の継続状況を確認する上での自己評価の指標の一つになった。</p> <p>◆専門家による生活習慣に関する講話</p> <p>東北大学加齢医学研究所所長の川島教授を講師として招き、食育講演会を実施。東中学校の全校生徒と保護者のほか、市内の中学校3年生も参加した。朝食の大切さ、睡眠時間の重要性、読書やSNS等の内容に、改めて自己課題を考える機会となった。</p> <p>生徒からは、「大会で自分の力を発揮するには食事が大切だと感じた」「朝食のおかずや量を少しずつ増やしていこうと思った」「これからは1日元気に過ごすために、朝ご飯をしっかりと食べようと思った」という感想が聞かれた。</p>
効果	取組後のアンケートでは、朝食を毎日食べる生徒の割合が増加。生徒の感想でも、「朝食の重要性を認識した」という声があった。
今後の課題	「生活ノート」等の取組は今後も継続し、食の意識を高めていく。生活の基盤である家庭を巻き込んだ取組として、学校のウェブサイトや学級通信への食育指導の掲載、PTAへのエビデンスに基づいた食育講話等、学校と協力した取組を継続していく必要がある。
取組における栄養教諭の工夫	年度当初の校内の教職員研修で、栄養教諭が市の食育計画や学校の食に関する指導の全体計画、教科等横断的な指導案等について説明したことで、学校全体で共通の目標に向かい取り組んでいくという共通理解が図られ、教職員が連携し各事業を実施することができた。



《講演会の様子》

図表 3-8 【児童生徒】朝食を食べる頻度(単一回答)／須坂市立東中学校における取組前後比較



(2) 栄養バランスを考えた食事に関する取組

① 課題認識

本事業実施前の児童生徒の課題として、「栄養バランスのよい食事が取れていない子供が増えている」という点は、全体で3番目に高い項目であり、栄養教諭にとって関心が高い項目と考えられる。

また、栄養教諭アンケートの結果から、児童生徒が栄養バランスを考えた食事・おやつを摂取を理解しているかどうかを聴取したところ、第1回(11月)は「ほぼ理解できている」は1校のみであり、児童生徒にとって大きな課題であることが分かる。栄養教諭アンケートの第1回と第2回を比較すると、「ほぼ理解できている」と「まあ理解できている」の合計は、第1回(11月)は21校中15校であったのに対し、第2回(1月)は21校中20校と増えており、課題ではあるものの、取組を行うことで容易に改善できるものと考えられる。

② 事前・事後アンケートからみえる効果

一日や一週間の栄養バランスを考えて食事やおやつをとるかについて、小学校低学年及び中学年では、事前アンケートよりも事後アンケートのほうが「はい」及び「どちらかといえばはい」の合計が高くなっており、取組による効果があったと考えられる。

図表 3-9 一日や一週間の栄養バランスを考えて食事やおやつをとるか(単一回答)／学年別

						(%)
		はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいい	いい	無回答
TOTAL (n=14563)		30.0	39.6	20.1	10.0	0.3
事前 合計 (n=7309)		30.1	38.8	20.5	10.3	0.2
事後 合計 (n=7254)		29.9	40.3	19.8	9.8	0.3
低学年	事前 (n=1471)	29.8	34.5	19.4	15.6	0.7
	事後 (n=1436)	29.6	36.0	20.1	13.9	0.4
小学校 中学年	事前 (n=1660)	35.8	36.6	18.0	9.5	0.2
	事後 (n=1653)	37.1	39.4	15.5	7.6	0.4
高学年	事前 (n=1581)	31.4	43.3	19.2	6.1	0.1
	事後 (n=1611)	30.2	43.6	19.2	6.9	0.1
中学校 全学年	事前 (n=2597)	25.9	40.0	23.5	10.4	0.1
	事後 (n=2554)	25.2	41.2	22.7	10.7	0.2

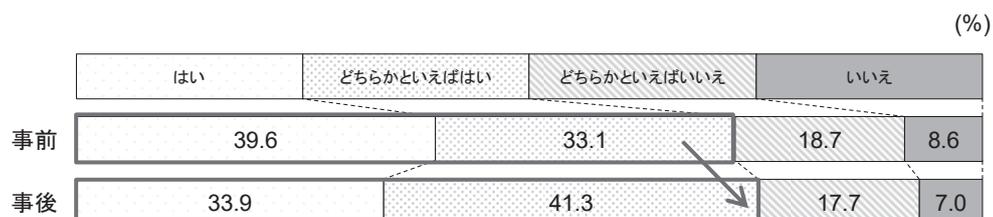
③ 各学校での取組事例

ここでは、ヒアリング調査結果から、栄養バランス改善に着目した取組を行っている事例について紹介する。

ア. 山口県宇部市立琴芝小学校

分類	概要
現状・課題	濃い味付けの料理や市販の食品に慣れており、給食に出る薄味の料理を敬遠する傾向。塩分の多い料理を控えるように心がけている児童の割合が72.7%である。
目標	宇部市全体で取り組んでいる「へら塩」（減塩）の取組を展開し、小学生の時期から減塩の習慣を身に付ける。
主な指標	塩分の多い料理を控えるように心がけている児童の割合
取組内容	<p>◆身近な食品の塩分量を「見える化」 <u>6年生の生活習慣病の予防に関する授業で、減塩の必要性について説明。日ごろ食べているカップラーメン等には、多くの塩分が含まれていることを紹介した。</u></p> <p>◆だしをしっかりととり、加える塩の量を減らす 5年生では家庭科の時間に白飯と味噌汁を作る調理実習を行った。味噌汁を作る際には煮干しを使い、だしをとる練習をした。児童は、<u>だしをしっかりとることで塩を多く入れる必要がなくなり、減塩につながることを理解した。</u></p> <p>◆保護者とともに、普段の家庭料理の塩分を測定 <u>1年生の保護者を対象に、給食試食会と塩分測定を行った。給食試食会は毎年行っているが、塩分測定は初めての試み。</u> 普段、家庭で飲んでいる汁物を持参してもらい、塩分測定器を用いて塩分濃度を測った。その後、給食を試食し、薄味のよさを実感してもらった。</p>  <p>《塩分測定の様子》</p>
効果	食べ残し減少、野菜嫌い改善等、給食の様子に変化がみられた。塩分の少ない味付けに慣れてきている印象。塩分の多い料理を控えるように心がけている児童の割合が増えた。
今後の課題	今年度行った取組は児童にとってきっかけづくりになったが、行動の改善にまで至っていないと感じているため、給食試食会、親子料理教室等、繰り返し食育の取組を続けていくことが重要である。
取組における栄養教諭の工夫	学校内では学級担任をはじめとする連携が不可欠。栄養教諭は給食の時間、毎日全クラスを巡回しており、学級担任と話しやすいように工夫しているほか、児童とも接する機会を作っている。

図表 3-10 塩分の多い料理を控えるように心がけている児童の割合(単一回答)／宇部市立琴芝小学校における取組前後比較



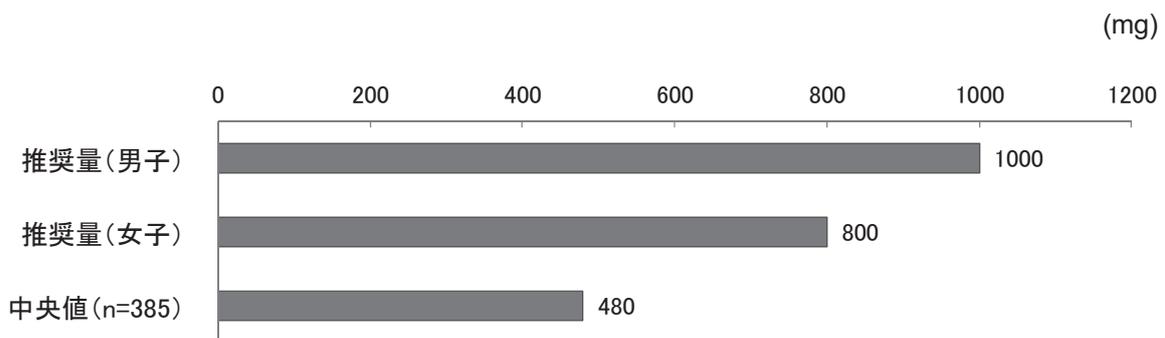
イ. 石川県七尾市立七尾東部中学校

分類	概要
現状・課題	カルシウムの推定摂取量の中央値は推奨量を大きく下回っている。 (「簡易カルシウム自己チェック表※」全校生徒の集計結果より)
目標	成長期に必要なカルシウム等不足しがちな栄養素を意識してとることのできる生徒を増やす。
主な指標	カルシウム自己チェック表によるカルシウム推定摂取量
取組内容	<p>◆カルシウム自己チェック表での実態把握 6月と11月に、カルシウム自己チェック表※の記入を全校生徒を対象に実施し、実態把握を行った。</p> <p>自己チェック表は5分ほどで記入でき、具体的な食品名と食べる頻度から得点を計算できる。こうして数値化することで、生徒は「次は少しでも得点を上げよう」という意識が高まった。</p> <p>※出典：簡便な「カルシウム自己チェック表」の開発とその信頼度の確定 石井光一/上西一弘/石田裕美/他 Osteoporosis Jpn/ 13-2/497-502 (2005. 05)</p> <p>◆骨密度測定で自分の体を客観視 中学3年生(希望者)を対象に、骨密度測定を実施した。自分の骨密度が数値化され、科学的根拠に基づいた評価も添えられ、同世代の骨密度と比べてどの程度高いのか、低いのか個別に分かるため、生徒へのインパクトは大きかったようだ。関連して、骨の構成成分となるカルシウムをとることの重要性を伝えた。</p> <p>◆家庭への確実な声かけ 回答用紙は集計後、通知表と同時に学級担任から保護者に手渡し。家庭でもカルシウム摂取に取り組むよう啓発した。</p>
効果	エビデンスを目の当たりにした生徒は、栄養バランスへの意識を向上した。カルシウム自己チェック表の内容を比較したところ、有意に増加した。
今後の課題	今年度の成果をもとに来年度以降も継続し、啓発する取組内容の充実と、小中連携による発達段階に応じた指導の充実が必要である。
取組における栄養教諭の工夫	全教職員で食育の重要性の共通理解を図る。特に、家庭科、保健体育科教員や生徒会の委員会と連携、調整を丁寧に行う。 生徒・保護者向けに、給食だよりで献立内容やその栄養等をわかりやすく説明したり、学校での食育の取組を紹介したりする。

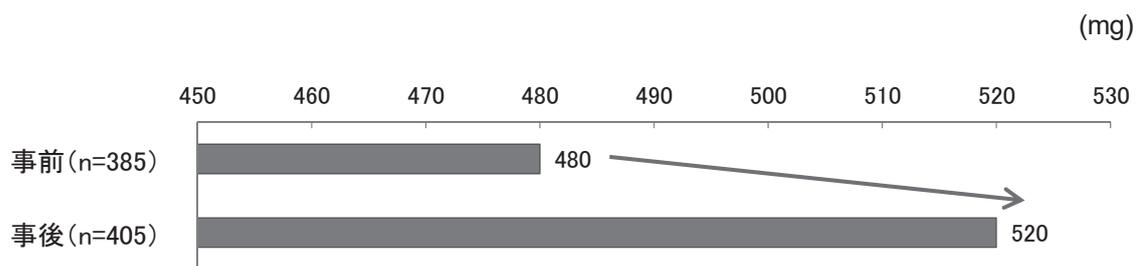


《カルシウム自己チェック表》

図表 3-11 カルシウム推定摂取量の推奨量との比較
(「簡易カルシウム自己チェック表」全校生徒の集計結果より)



図表 3-12 カルシウム推定摂取量(中央値)／七尾市立七尾東部中学校における取組前後比較



(3) 食事マナーに関する取組

① 課題認識

本事業実施前の児童生徒の課題として、「食事マナーが身につけていない子供が多い（増えている・改善しない）」は最も多く挙げられた項目であり、各学校において課題としてとらえられていることが分かる。

子供を取り巻く家庭環境の変化もあり、児童生徒が一人で食事をする場面も多く、家庭のみで食事マナーを身に付けることは限界があり、学校からの介入が必要と考えられる。

また、栄養教諭アンケートの結果から、児童生徒が食事マナーを理解しているかどうかを聴取したところ、「ほぼ理解できている」と「まあ理解できている」の合計は、第1回（11月）は21校中15校であったのに対し、第2回（1月）は21校中19校と増えており、取組を行うことで、児童生徒の食事マナーへの理解は進むものと考えられる。

② 事前・事後アンケートからみえる効果

食事マナーについては、事前・事後アンケートの結果から、学年別では大きな変化はみられないものの、すべての学年の児童生徒を対象に取組を行った学校では、事前・事後アンケートとも高い数値となっており、すべての学年を対象とした取組を行うことで効果が得られることが分かる。

図表 3-13 食事マナーに気をつけているか(単一回答)／取組状況別

		(%)				
		はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいいえ	いいえ	無回答
TOTAL (n=14563)		52.3			35.5	9.4 2.6
すべての学年の児童生徒を対象に取組を行った学校	事前 (n=6828)	52.0			35.8	9.4 2.6
	事後 (n=6810)	53.2			35.3	8.9 2.3
特定の学年の児童生徒を対象に取組を行った学校	事前 (n=408)	50.5			34.1	12.0 2.9
	事後 (n=380)	53.4			37.4	6.6 2.1
取組を行っていない学校	事前 (n=73)	27.4	20.5		37.0	15.1
	事後 (n=64)	23.4	29.7		32.8	14.1

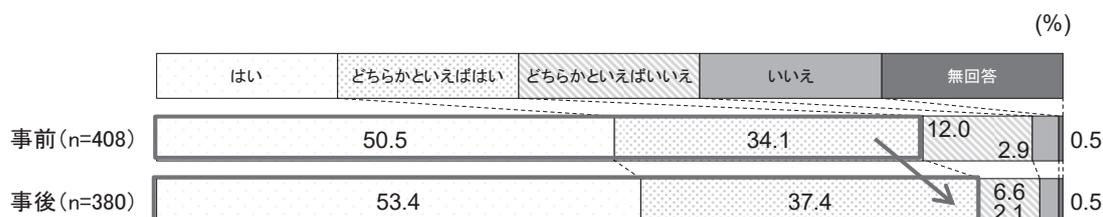
③ 各学校での取組事例

事前・事後アンケートの結果から、特に改善がみられた学校を中心に、具体的な取組内容を紹介する。

ア. 北海道帯広市立栄小学校

分類	概要
現状・課題	偏食傾向、箸の使い方や衛生的な行動等食事マナー等の課題がみられる。1年生からの意識付けが必要だと感じている。
目標	食事マナーに気を付けている児童の割合を増やす。
主な指標	食事マナーに気を付けている・どちらかといえば気を付けている児童の割合
取組内容	<p>◆1年生を対象とした食事マナーの授業</p> <p>1年生を対象に、4月中旬の給食開始日当日、給食前の授業時間に給食時間の流れや食事マナー等に関する授業を行った。</p> <p>最初に全体として意識付けをすることが、後に重要になると感じたため、給食前に行った。これは学級担任としても、食事マナーに関する確認するよい機会となった。</p> <p>◆箸の使い方や衛生的な行動から始める</p> <p>学級担任も児童の食事マナーについて気にしており、日々の給食のときに指導している。特に、低学年では箸の使い方や衛生的な行動から始めて、それ以外の食事マナーについても指導している。</p>  <p>《1年生給食指導の様子》</p>
効果	1年生の給食開始時のアプローチ、また日々の学級担任の指導もあり、食事マナーに関する意識や行動を改善した。取組後のアンケートでは、食事マナーに気を付けている児童の割合が増加した。
今後の課題	最初に給食が始まる際に意識付けをすることが重要なため、1年生は今後も4月の給食開始日に指導する。また、栄養教諭は日ごろの声かけに意味があるため、1学級に入る時間を増やし、児童とのコンタクトを増やしてしっかり関わられるようにしていく必要がある。
取組における栄養教諭の工夫	<p>栄養教諭は給食センターと学校を兼務しているため、センターの様子が分かるが、児童はセンターの様子を知る機会は少ない。食事マナーの必要性を訴えるだけでなく調理員の給食に込めた思いや苦労を伝えた。</p> <p>また、栄養教諭の専門性を活かして、学級担任に毎週の給食に関する指導資料である献立日より「いただきます！」を配布するといった情報提供を行った。</p>

図表 3-14 食事マナーに気を付けているか(単一回答)／帯広市立栄小学校における取組前後比較



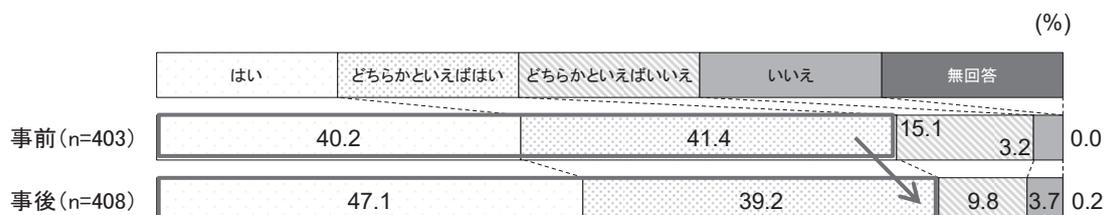
イ. 山形県山形市立桜田小学校

分類	概要
現状・課題	食事マナーの知識はあるものの、給食の様子を見ると、なかなか定着していないと感じる。
目標	食事マナーに気を付けている児童の割合を増やす。
主な指標	食事マナーに気を付けている・どちらかといえば気を付けている児童の割合
取組内容	<p>◆ランチョンマットを使用した配膳 地域のJAから提供された主食・主菜・副菜・汁物の配置がイラストで描いてあるランチョンマットを、給食の時間や家庭で使用した。 家庭での食事においては、ランチョンマットのイラストどおりに食器を配置することで、主食・主菜・副菜・汁物のうち足りないものがないか確認することができる。児童から家庭へ、栄養バランスのとれた食事に対する意識付けができた。</p> <p>◆「食べ方名人になろう」 食事マナーに関して、自己評価でできている食事マナーに丸を付ける「食べ方名人になろう」という独自アンケートを毎年行っている。</p>
効果	取組を通じて、正しく食器を置くことができる児童が増加。自分以外の児童の配膳をする際も、自然に気を配ることができている。食だけでなく、相手への思いやり、真心につながっているようだ。取組後のアンケートでは、食事マナーに気を付けている児童の割合が増加した。
今後の課題	減塩対策、肥満対策等、取組を続けることで明らかになる成果もあると考えているため、来年度以降も内容や実施方法について改善しながら取組を続け、桜田小学校では当たり前の取組になるようにしていきたいと考えている。
取組における栄養教諭の工夫	栄養教諭が核となり、ほかの先生との協力体制を築くことが重要。職員室での教諭同士の会話を聞き、必要に応じて会話に参加する。給食の時間に各クラスを回り、ほぼすべての児童を把握していることが栄養教諭ならではの役割。児童の悩みを聞く場面があれば学級担任にすぐ報告しサポートする。そこには児童を見守るという共通の役割がある。



《ランチョンマット》

図表 3-15 食事マナーに気を付けているか(単一回答)／山形市立桜田小学校における取組前後比較



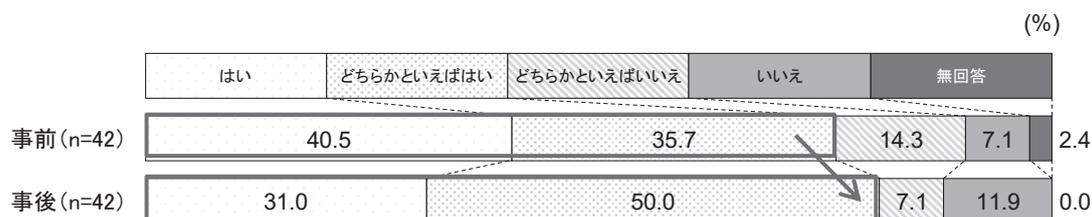
ウ. 三重県立聾学校

分類	概要
現状・課題	給食で食器を持たない、肘をついて食べる等食事マナーが身に付いていない児童・生徒が多い。家庭においても、指導がされていない、好き嫌いが容認されてしまうなどの課題があると考えられる。
目標	食事マナーに気を付けている児童・生徒の割合を増やす。
主な指標	食事マナーに気を付けている・どちらかといえば気を付けている児童・生徒の割合
取組内容	<p>◆手話漫才コンビを招いた食事マナー講座 全校の幼児・児童・生徒を対象に、<u>食事マナーを楽しくわかりやすく伝えてもらうため、10月に手話漫才コンビを招いた。</u>幼児・児童・生徒は、終わってからサインや写真をせがむ等、憧れを抱いた様子であった。</p> <p>◆栄養教諭と学級担任との連携 <u>小学部2年生を対象に「おはし名人になろう」というテーマで食事マナーの授業を行った。</u>栄養教諭の専門知識を、手話に慣れた学級担任が分かりやすく伝えることで、児童の理解を促した。</p>
効果	食事マナーの理解が進んだだけでなく、行動としても少しずつ変化が表れている。中学部では、給食の配膳をきちんと整えるようになり、配置が間違っていたら直すといった行動も見られるようになった。実際に取組後のアンケートでは、食事マナーに気を付けている児童・生徒の割合が増加した。
今後の課題	今回の取組を通じて教職員や児童・生徒の意識が高まったため、食事マナーや残食の削減を重視していく方針は変えず、来年度も取り組んでいく方針である。
取組における栄養教諭の工夫	学級担任は個々の児童・生徒の状況をよく把握しているが、栄養教諭も同じように把握し、児童・生徒のニーズに合った取組や支援を行っていかねばならないと考えている。



《漫才を見る幼児・児童・生徒の様子》

図表 3-16 食事マナーに気を付けているか(単一回答)／三重県立聾学校における取組前後比較



(4) 地域との連携に関する取組

① 課題認識

本事業実施前の児童生徒の課題として、「伝統的な食文化や行事食に対する関心が低い（向上しない）」という点は、全体で2番目に高い項目であり、栄養教諭にとって関心が高い項目と考えられる。

しかしながら、給食で、市町村内産食材や都道府県産食材を使用している割合は約8割であり、給食で郷土食を提供している学校は全体の3分の1程度であった。

また、今年度の事業において、「郷土料理や地場産物を取り入れた給食の献立づくり」「地場産物の調達や授業での連携のための地元生産者との連絡調整」といった内容に取り組んでいる学校も多く、栄養教諭自身も、地域の生産者等と連携するための方法を探っているとの声もヒアリングで多く聞かれた。

地域と連携することは、子供たちにとって地域への理解を深めることにもなるため、積極的に地域と連携していくことが求められる。

② 事前・事後アンケートからみえる効果

地域と連携することは、地域でとれる食材への理解を深め、ひいては地域の食文化の理解につながる。地域の食文化として、伝統的な食文化等への関心については、小学校中学年が最も高いが、全体としては、事前・事後アンケートでの変化がみられなかった。

図表 3-17 伝統的な食文化や行事食についての関心(単一回答)/学年別

		(%)				
		はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいいえ	いいえ	無回答
TOTAL (n=14563)		28.9	31.9	23.1	12.6	3.6
事前 合計 (n=7309)		29.1	31.5	22.5	13.0	3.9
事後 合計 (n=7254)		28.6	32.2	23.6	12.2	3.3
低学年	事前 (n=1471)	29.8	29.4	20.0	16.7	4.1
	事後 (n=1436)	34.3	27.9	20.5	13.2	4.1
小学校 中学年	事前 (n=1660)	44.6	27.0	14.0	10.5	4.0
	事後 (n=1653)	39.9	30.3	15.3	10.5	4.1
高学年	事前 (n=1581)	32.3	33.3	20.3	10.9	3.2
	事後 (n=1611)	29.1	33.3	22.7	11.5	3.4
中学校 全学年	事前 (n=2597)	16.7	34.6	30.8	13.8	4.1
	事後 (n=2554)	17.9	35.1	31.4	13.3	2.3

③ 各学校での取組事例

ここでは、ヒアリング調査結果から、地域と連携した取組を行っている事例について紹介する。

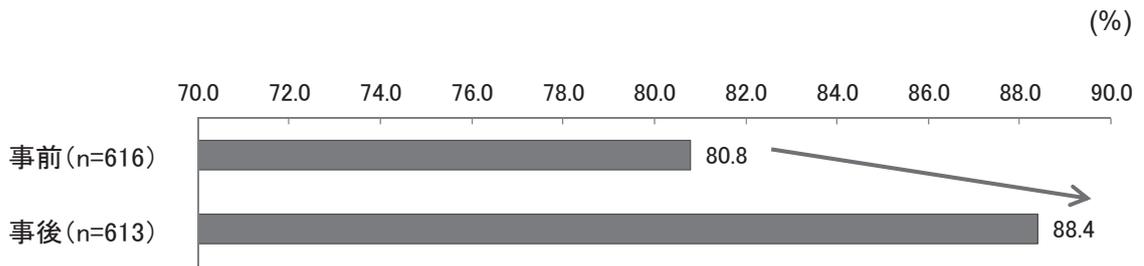
ア. 静岡県裾野市立東小学校

分類	概要
現状・課題	茶の産地として知られる静岡県だが、東小学校が位置する裾野市では大きな茶畑は少なく、児童にとって静岡茶は身近な存在ではない。急須がある家庭は半数程度。茶はペットボトルで飲むことが多く、家で茶を淹れる機会は少ない。
目標	小学校において静岡茶を飲む機会や学ぶ機会を提供することで、静岡茶の産地、歴史及び文化等について理解を深め、毎日の習慣として静岡茶を飲む児童を増やす。
主な指標	裾野市でお茶を生産していることを知っている児童の割合 家で緑茶を毎日飲む児童の割合
取組内容	<p>◆地域と連携し、静岡茶の生産について知る</p> <p>4年生は総合的な学習の時間を活用し、静岡茶に関する体験を多く行った。10月には男女とも茶摘み娘の恰好をして秋冬番茶の茶摘みを体験した。</p> <p>さらに、裾野市手もみ保存会を招いて手もみ茶体験を行ったり、茶道教室を実施し抹茶を飲み、お茶菓子を食べる体験をしたりした。</p> <p>また6年生は、日本茶インストラクターを招いて温度や待つ時間等の詳しい煎茶の淹れ方を学んだ。キャリア教育としてお茶に関連した仕事についても話を聞いた。</p> <p>◆PTAがお茶講座を実施、児童の授業への参加も</p> <p>PTAの組織の一つである家庭教育学級では、お茶講座を今年度3回実施し、各回20～30名の保護者が参加した。参加した保護者の一部には授業に参加してもらい、家庭教育学級で学んだお茶の淹れ方を児童に教えた。</p>
効果	児童は静岡茶に関するさまざまな体験をし、静岡茶への理解が深まった。授業で教わったお茶の淹れ方を「家でも行った」「家でも行いたい」という感想があり、実際に裾野市でお茶を生産していることを知っている児童、家で緑茶を毎日飲む児童の割合が増加した。
今後の課題	取組を続けるために予算が必要となるが、ほかの取組と関連させる等して継続する方法を検討する。家庭教育学級等は地元の協力を得ながら続ける。
取組における栄養教諭の工夫	栄養教諭がスキルを発揮するには、学級担任や保護者の協力が大切。保護者には、明るく元気に協力を頼むことを意識している。

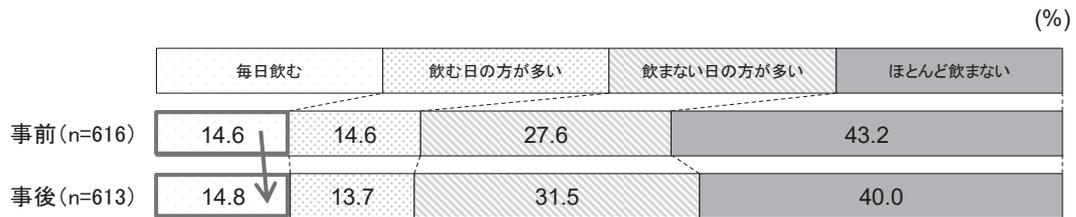


《茶摘み体験の様子》

図表 3-18 裾野市でお茶を生産していることを知っている児童の割合(単一回答)／
裾野市立東小学校における取組前後比較



図表 3-19 家で緑茶を飲む児童の割合(単一回答)／裾野市立東小学校における取組前後比較



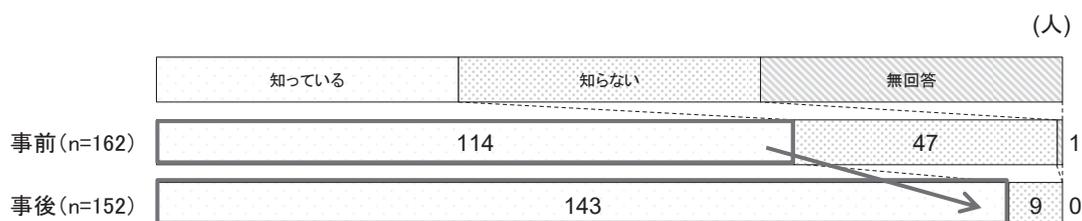
イ. 北海道帯広市立大空中学校

分類	概要
現状・課題	十勝・帯広は豊かな自然環境や食材という恵まれた環境にあるが、そのことを知らない生徒が全校で約3割と多い。近隣に農地が広がるが、営農家庭はなく、農業や食への興味、関心は低い。
目標	地域の生産者、加工業者、給食調理員等と連携して取組を進め、地域の農業や学校給食について理解する。
主な指標	十勝や帯広で生産された食材についての理解 地産地消についての理解
取組内容	<p>◆2年生を対象とした収穫体験</p> <p>JA青年部の生産者とともに給食をとり、班ごとに「生産の苦労」等の話をしながら交流を行った。</p> <p>次に、総合的な学習の時間に、長いもの収穫体験を行った。長いもの収穫は、予め重機で掘った穴に入る独特の方法を行うため、生徒は興味を持って取り組んでいた。収穫した長いものは1人1本自宅用にいただき、後日生徒からは、「とろろや焼いておいしく食べた」という声が聞かれた。</p> <p>◆「地場産物を食べたい!」と思えるような新聞づくり</p> <p>給食交流、収穫体験、給食に関わる方への取材活動等を経て、「地産地消」と「給食のできるまで」の2つのテーマで新聞づくりを行った。取材は、生産者、加工業者、学校給食調理員を対象に行い、給食ができるまでの過程や給食に関わる方々の思いを、班ごとに新聞としてまとめた。</p>
効果	食べ物や、関わる方々への感謝の気持ちが育まれ、生徒からは、「給食を残さないで食べたい」という感想が多く聞かれた。出来上がった給食だけでなく生産・調理の過程にも目を向けられるようになり、地元で生産されている食べ物への理解が深まった。
今後の課題	予算の制約上、難しい部分もあるが、給食ができる過程を知るための貴重な体験であるため、今後も関係機関と連携を取り、協力してもらえよう願いたい。
取組における栄養教諭の工夫	今回の授業は栄養教諭、学級担任、地域の関係者と連携して行った。特に地域の関係者とは何度も打ち合わせを重ね、生徒と関係者が直接交流する貴重な機会を設けることができた。授業に協力していただく上では、栄養教諭と地域の関係者で日ごろからコミュニケーションを取り、信頼関係を築くことの大切さを改めて実感した。

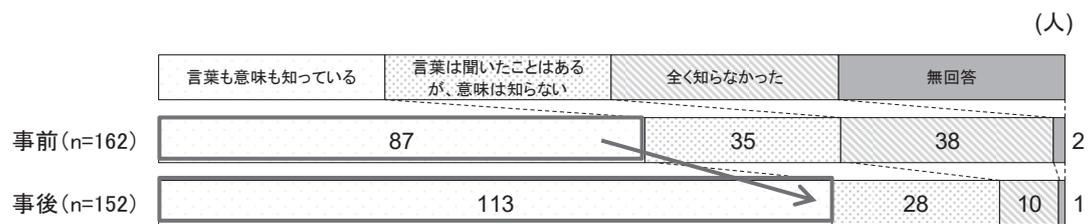


<< 収穫体験の様子 >>

図表 3-20 学校給食で十勝や帯広で生産された食材を使用していることを知っているか(単一回答)／帯広市立大空中学校における取組前後比較



図表 3-21 地産地消について知っているか(単一回答)／帯広市立大空中学校における取組前後比較



3.2 連携に関する取組詳細

ここでは、栄養教諭を核とした学校内外での連携の状況について、代表的な事例を紹介する。ヒアリングにおいて特に効果がみられた学校のほか、事前・事後アンケートの結果から取組によって効果がみられた学校を取り上げている。連携体制の構築においても、これらの学校の取組内容の詳細をもとに、自校の状況に応じた取組内容を検討することが求められる。

図表 3-22 全国への普及方策で取り上げる事例(連携に関する取組)

分類	学校名
学校内の連携	<ul style="list-style-type: none">● 奈良県橿原市立橿原中学校● 三重県立松阪あゆみ特別支援学校
栄養教諭の連携強化	<ul style="list-style-type: none">● 長野県須坂市立仁礼小学校・東中学校● 山口県宇部市立船木小学校

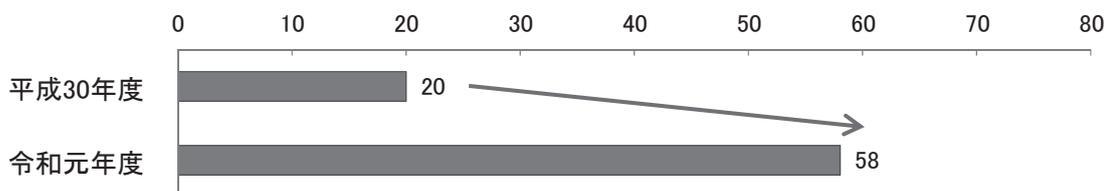
(1) 学校内の連携に関する取組

ア. 奈良県橿原市立橿原中学校

分類	概要
現状・課題	本校の栄養教諭は 20 代の若手。ほかの教職員にどのように声かけをしたらよいか迷う場面が多く、学校全体として食育を推進する意識の醸成に苦戦している。食育の時間を確保することが難しく、家庭科の調理実習で家庭科教諭と連携した指導を行うにとどまっていた。
目標	ほかの教諭と連携した教科横断的な食育の授業を展開する。
主な指標	栄養教諭の食育指導に係る取組時間数
取組内容	<p>◆朝の時間を活用した短い授業の展開 <u>1年生を対象に、授業開始前の読書・学習時間と朝学活(15分)を利用して、朝食の重要性について話をした。</u>授業開始前の時間は教科の時間と比べ、時間の確保がスムーズであった。</p> <p>◆保健体育の授業で栄養教諭が指導 栄養教諭は、保健体育や理科等の教科で食育に関連した授業を展開できるのではないかと考え、担当教諭に相談した。 <u>保健体育では担当教諭と連携し、3年生「食生活と健康」の単元で授業を実践することができた。</u>健康に過ごすための食生活に関する指導のほか、朝食摂取前後のサーモグラフィー、朝食と学習集中力との関係、朝食アンケートの結果を示した。</p>  <p>《チャレンジタイムにおける指導の様子》</p>
効果	食育の時間の確保が難しい中でも、授業開始前の時間を活用した「朝食の重要性」の授業で、生徒から「これからは毎日欠かさず少しでも食べたい」等の感想が聞かれた。また、保健体育の授業では栄養教諭の専門知識が発揮され、担当教諭から高い評価を得た。食育指導に係る取組時間数も前年度より増加した。
今後の課題	これまでほかの教職員への声かけに遠慮があったが、学校全体を巻き込んだ食育を実施するために教職員一人ひとりより積極的に関わり学校全体の食育に対する意識を高める必要がある。 教職員から食育に関してどのように取り組めばよいかわからないとの意見があり、専門的な知識を生かした資料の作成や簡単な指導案を用意した上で相談する等、理解を促す工夫を行っていく。
取組における栄養教諭の工夫	部活動で運動をしている生徒から「どうしたら筋肉がつくのか」等と問われることがあり、必要な場面での確かなアドバイスをできるように常に自己研鑽をしていかなければならない。

図表 3-23 実践校栄養教諭の食育指導に係る取組時間数／
 橿原市立橿原中学校における前年度との比較

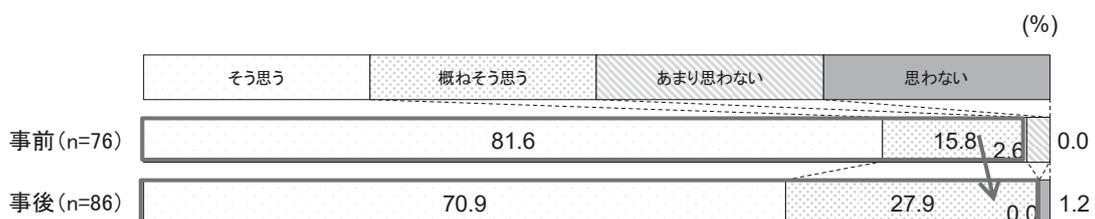
(時間)



イ. 三重県立松阪あゆみ特別支援学校

分類	概要
現状・課題	障がいの特性から特定の食材へのこだわりが強く、偏食になりがち。感覚過敏があると、食材の粒や粘り・ぬめり等の食感や色等の見た目から特定の食材を拒否することがあった。保護者は、児童・生徒の偏食の理由や障がいの特性に由来する課題への対処の仕方が分からず悩んでいた。
目標	知的障がいを持つ児童・生徒の特性を踏まえた上で、各教職員が食の指導のあり方を理解し、食育の推進に取り組む。
主な指標	食に関する指導が児童・生徒の成長にとって重要だと考える教職員の割合
取組内容	<p>◆作業療法士を招いた講演で、児童・生徒の特性を理解 作業療法士を講師として招き、「特別な支援を必要とする子どもへの食育について」というテーマで、保護者対象の講演会を開催した。保護者からは「野菜を食べないがどうしたらよいか」「箸をうまく持たせるには」等の質問が多数あり、関心の高さがうかがえた。保護者が普段感じている悩みに答える機会となった。</p> <p>◆教職員の間で指導方法を共有 保護者向けの講演会の後、教職員向けの講演会も開催。見た目（形状・色）、食感を嫌がる場合の対応等、実例を挙げながらの説明があった。保護者と教職員が同じ内容を学ぶことで、児童・生徒への指導についての共通認識を持つことにつながった。</p>  <p style="text-align: center;">《講演会の様子》</p>
効果	教職員は、児童・生徒の特性を踏まえた指導についての理解が深まった。また講演会で保護者から挙げた質問を通じて保護者が欲している情報が分かり、今後の発信の仕方が明確になった。結果、食に関する指導が児童・生徒の成長にとって重要だと考える教職員の割合も増加した。
今後の課題	今回、協力を仰いだ外部講師とは、引き続き関係を構築できるよう、声かけを行っていく予定である。保護者対象の講演会については、早めに計画を立てて周知することで、保護者の参加を増やすことが可能と考えている。
取組における栄養教諭の工夫	学級担任との連絡・調整、地域との関係構築を主体的に担うことが必要であると考えている。児童・生徒の特性を踏まえた食育のあり方については、学級担任との会話の中で気付くことが多く、学級担任との連携を重視している。 一方、栄養教諭としてどのような取組や成果を目指すかという点については、自身から発信していく必要があると考えている。

図表 3-24 食に関する指導が児童・生徒の成長にとって重要だと考える教職員の割合（単一回答）／三重県立松阪あゆみ特別支援学校における取組前後比較

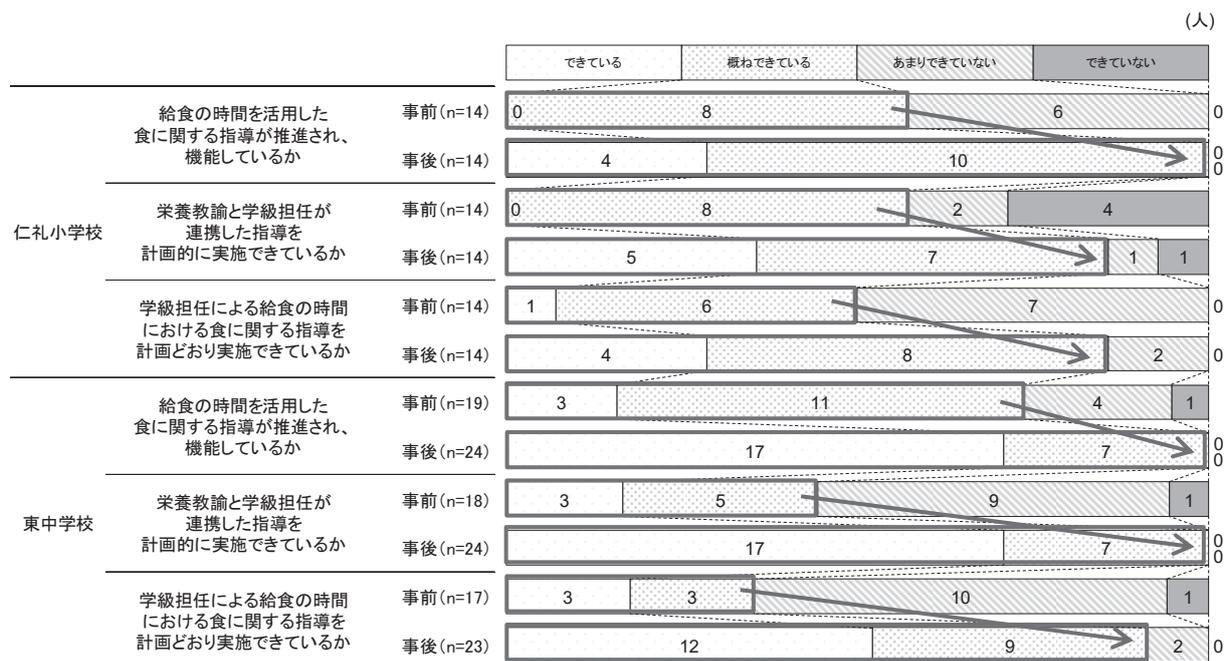


(2) 栄養教諭の連携強化に関する取組

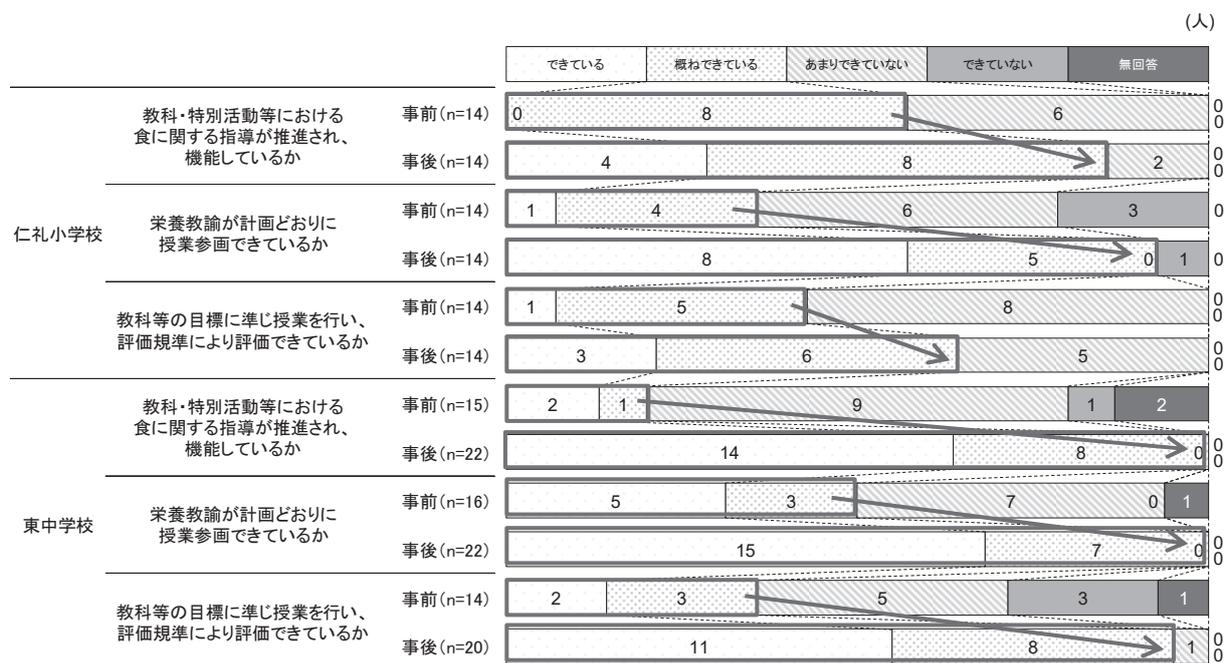
ア. 長野県須坂市立仁礼小学校・東中学校

分類	概要
現状・課題	須坂市の栄養教諭は2名おり、ほぼ毎日市内16校の小学校・中学校・支援学校に出向き、食育授業を実施している。ただし、各校の食育の取組については、学校間に温度差がある。また、栄養教諭は普段、給食センターに勤務しているため、教職員は給食担当にならなければ、「食育」は「職外」という認識があった。
目標	実施校での食育の取組を通して、教職員の食育に対する意識改革を図り、学校全体で栄養教諭と連携した食育の実施につなげる。
主な指標	教職員の食に対する意識の向上
取組内容	<p>◆管理職や教職員と連携する 年度当初の教職員研修や学校保健委員会で、「須坂市の目指す食育」について、どのように具体化していくのか話し合い、共通理解を図ったことが、全校体制による実施につながった。栄養教諭が「身体づくりと食」についての専門職として、教職員と連携を深めて、給食時間を食育の時間と位置付けた。</p> <p>◆教頭が栄養教諭と学校を結ぶ役割を担う 仁礼小学校・東中学校とも、教頭が「調整役のキーマン」としての役割を果たす。教頭の調整により、各教科等の目標と栄養教諭が食育として実施したい内容を結び付け、学校全体のマネジメントを行った。</p>
効果	教頭がキーマンとなり連携する教科や担当教諭との調整を行い、食育は学校全体で取り組むべきという意識を醸成できた。 実施校の教職員の食に対する意識を向上し、給食や教科等における食に関する指導ができている割合が増加した。
今後の課題	教頭が学校全体のマネジメントを行う中で、食育のキーマンとなり担当教諭と栄養教諭の連携を図る体制を、他校にも広げていきたい。
取組における栄養教諭の工夫	<p>栄養教諭は、須坂市食育推進基本計画に沿って各課等と連携し、9年間の義務教育の中で学校・家庭・地域の役割を明確にし「つける力（めざす姿）」を保護者に周知。</p> <p>教職員には須坂市教育委員会が目指す教育の中の食育の位置付けを周知。単発で行う食育でなく、「新学習指導要領に向けた教科等横断的なカリキュラム・マネジメント」としての食育の位置付けを模索。</p>

図表 3-25 【教師】給食の時間における食に関する指導(単一回答)／
須坂市立仁礼小学校・東中学校における取組前後比較

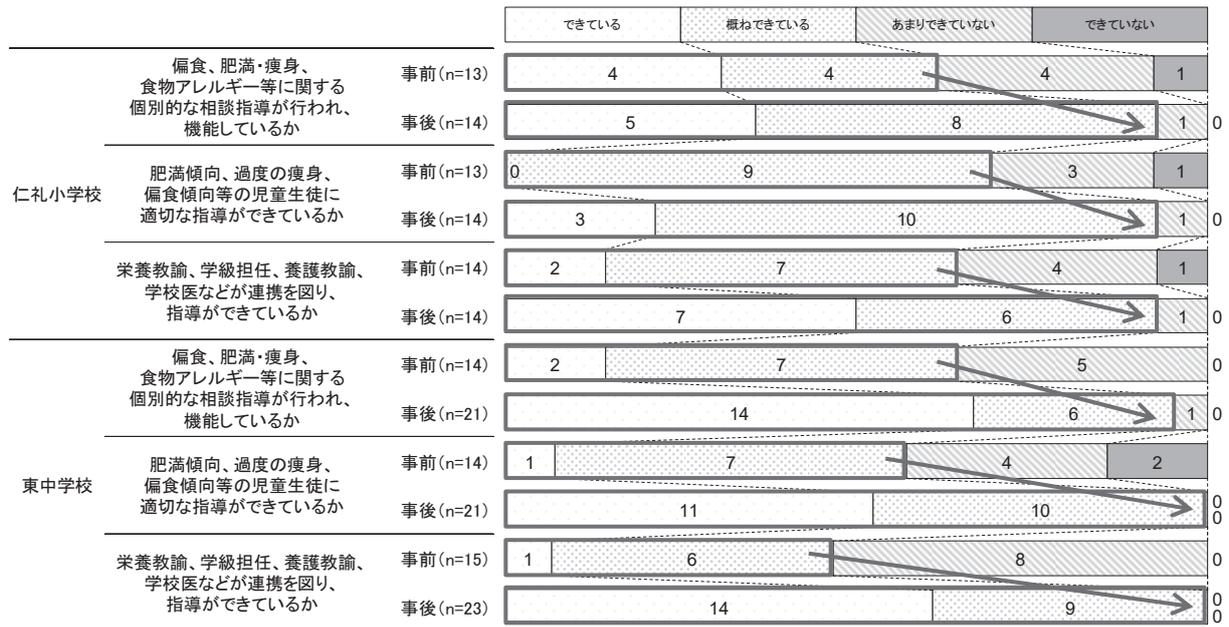


図表 3-26 【教師】教科等における食に関する指導(単一回答)／
須坂市立仁礼小学校・東中学校における取組前後比較



図表 3-27 【教師】個別的な相談指導(単一回答)／
須坂市立仁礼小学校・東中学校における取組前後比較

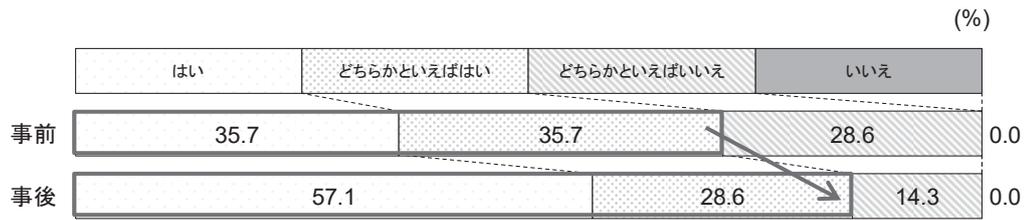
(人)



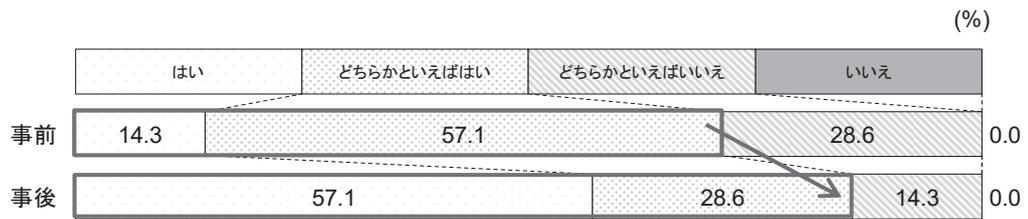
イ. 山口県宇部市立船木小学校

分類	概要
現状・課題	食に関する指導をより充実させるため、他校の栄養教諭との連携を強化する必要があった。
目標	宇部市内の栄養教諭との連携を強化し、指導力の向上を目指す。
主な指標	<p>栄養教諭（学校栄養職員）間で互いに学びあう関係があると思う栄養教諭の割合</p> <p>経験年数差のある栄養教諭（学校栄養職員）に気軽に相談することができると思う栄養教諭の割合</p>
取組内容	<p>◆先輩栄養教諭の助言により指導案を繰り返し検討</p> <p>公開授業の対象は6年生の生活習慣病の予防に関する授業。まずはベテラン栄養教諭の授業を参観し、内容を協議した。その後、栄養教諭間で模擬授業を行いながら指導案の検討を繰り返した。さらに、校内でも指導案の検討を行った。</p> <p>当初、栄養教諭は血管の模型や死因のデータから授業を始めるつもりだったが、ベテラン栄養教諭の助言を受け、動画（男児が夜遅くまでゲームをしたり、カップラーメンやポテトチップスを食べたりしている様子）から始めることとした。実際の授業では、児童にとっては自分の生活を振り返るきっかけとなり、集中して聞いている様子であった。</p> <p>◆公開授業を通して児童の減塩意識を向上</p> <p>授業の中では、菓子に含まれる脂質・食塩の量を成分表示から調べたり、砂糖・脂質・食塩をとり過ぎない間食のとり方を考えたりした。取組後、塩分の多い料理を控えるように心がけている児童の割合が増加した。</p> <div data-bbox="948 577 1335 846" data-label="Image"> </div> <p>《指導案検討会の様子》</p>
効果	公開授業研究会の準備では、他校のベテラン栄養教諭に指導・助言を受けながら市内全栄養教諭・学校栄養職員で指導案を検討。公開授業では児童の反応がよく、授業の工夫改善の成果を実感した。宇部市全体でも、栄養教諭の連携に関する指標が向上した。
今後の課題	今年度、保護者に向けた取組は情報発信が主であったため、来年度以降は保護者とともに取り組む機会を増やせたらよいと考えている。例えば、宇部市教育委員会が保有する塩分測定器を家に持ち帰って食事の塩分量を測る等、保護者を巻き込んだ取組が考えられる。ただ、保護者への強制はできないため、忙しい家庭や関心があまり高くない保護者の取組の推進には、課題が残ることが考えられる。
取組における栄養教諭の工夫	積極的に動けるよう、情報のアンテナを張り、きちんと関係各所と話ができる能力が必要。校外では自治体の担当課等、地域での照会先がある程度わかれば、スムーズに依頼を進められることが多い。校内で学級担任と話をする際は、児童の様子を把握しておかなければならないため、日ごろから変化に気付けるよう注意している。

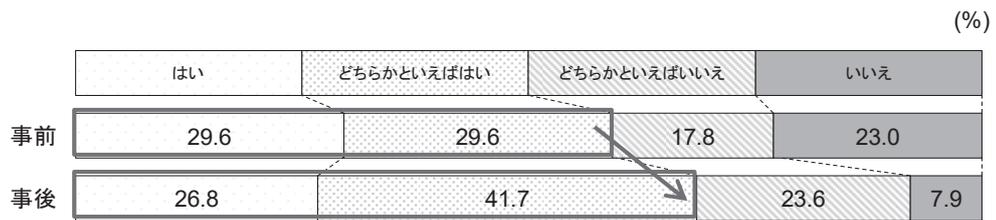
図表 3-28 栄養教諭間で互いに学びあう関係があると思う栄養教諭の割合(単一回答)／宇部市における取組前後比較



図表 3-29 経験年数差のある栄養教諭に気軽に相談することができると思う栄養教諭の割合(単一回答)／宇部市における取組前後比較



図表 3-30 塩分の多い料理を控えるように心がけている児童の割合(単一回答)／宇部市立船木小学校における取組前後比較



3.3 栄養教諭の役割・工夫

食育を進める上では、栄養教諭が中心的な役割を果たしながら、家庭や保護者、生産者や地域の関係団体、ほかの教職員等と連携して取組を行うことが重要である。栄養教諭へのアンケート結果やヒアリング結果から、栄養教諭が中心となって取り組んだ内容や工夫した点として、家庭や保護者との連携、生産者や地域との連携、学校内での連携の3つの観点から整理する。

(1) 家庭や保護者との連携

児童生徒の食習慣の改善には家庭の協力が不可欠である。保護者も参加できる取組を行う、学級担任等のほかの教職員と連携する等の工夫で、家庭とのつながりを作ることが大切である。

具体的には、学級担任と連携し児童生徒の食に関する課題を把握したり、給食試食会、親子での料理教室、保護者向けの食育講演会を開催している学校が多くみられた。このほか、保護者を講師役として授業に招き、児童生徒と一緒に取組を進めている学校もみられた。

図表 3-31 家庭や保護者との連携について栄養教諭が担った役割(栄養教諭アンケートより)

食物アレルギーや肥満/やせ傾向のある子供や保護者等に対する個別指導の実施	7
保護者を対象とした食育教室(親子料理教室・給食試食会・講演会等)の企画・実施	19
保護者の食育に関する意識等の実態把握(アンケート等の作成・実施)	11
学校と家族をつなぐ方策の企画・実施	11

家庭や保護者に働きかける際の工夫としては、以下の点が挙げられる。

- 通信や給食レシピ等を作成し、児童生徒を通じて家庭に配布する
- 授業参観や懇談会の際に、学級担任に保護者への働きかけを依頼する
- P T Aを通じて取組への参加を呼び掛ける
- P T Aとともに食に関する取組を企画・実施する

(2) 地域への働きかけ

地域と連携することで、その地域の状況や特産物等への理解が深まるため、栄養教諭が自ら地域との関係性を構築することも重要である。

具体的には、地域の生産者を招き授業で体験談を話してもらう等、児童生徒との交流の機会を作ったり、生産者やJ A指導のもと農作物の栽培・収穫を体験したり、地域のシェフが食文化や味覚に関する授業を開催したりしている学校がみられた。ほかにも、地域の生産者から話を聞いた上で、児童生徒が作成した食育通信を自治会や行政で配布し、児童生徒の取組を地域に共有する取組をしている学校もあった。

図表 3-32 生産者や地域、関係団体等との連携について栄養教諭が担った役割(栄養教諭アンケートより)

地場産物の調達や授業での連携のための地元生産者との連絡調整	13
校内や地域、生産者などを含む地域全体の食育推進体制の構築	11
学校と地域や生産者をつなぐ方策の企画・実施	12

地域へ働きかける際の工夫としては、以下の点が挙げられる。

- 行政、教育委員会、J A、N P O等、地域で中核となる団体に連携を依頼する
- 関係団体のリストを作成し、教職員間で共有する
- 栄養教諭や教職員等の人脈から、又はSNS等で、学校との連携にふさわしい人や団体を探す
- 有名な講師よりも、地域の身近な講師の方が、児童生徒が親しみを感じることもある
- 収穫の時期等、生産者の繁忙期をできるだけ避ける

(3) 学校内での連携

栄養教諭が学校で食育に取り組んでいくためには、校内での連携が必要不可欠である。そのため、栄養教諭自身が何を求められているかを理解し、工夫しながら校内に働きかけていくことが求められる。

学校内で連携するために、

- 校内・校外の関係者と連携するための積極的な行動
- 協力を依頼するためのコミュニケーション能力
- 食物や身体についての専門知識
- 児童生徒一人ひとりの実態把握
- 取組を行うにあたっての、課題設定→取組の企画立案→成果の確認→評価というプロセスの意識

といったことが栄養教諭には求められる。

図表 3-33 学校内での連携について栄養教諭が担った役割(栄養教諭アンケートより)

「つながる食育推進事業」全体の事業計画の検討・計画づくり	15
教科等での食に関する指導の実施	15
学級担任等と連携した食に関する指導の実施	18
教科等で活用する食に関する指導教材の作成	13
給食の時間での食に関する指導の実施	20
郷土料理や地場産物を取り入れた給食の献立づくり	18
教職員等を対象とした食育に係る教育内容や食事マナー等に関する指導	10
子供の食生活等の実態把握(アンケート等の作成・実施)	16
食育推進啓発パンフレットや配布物等の企画・作成	17

また、学校内で取組を円滑に進めるための工夫としては、以下の点が挙げられる。

- 学校全体として食育に取り組むよう、管理職に支援を依頼する
- 職員室での教職員の会話に耳を傾け、会話に参加する
- 食育への関心が薄い教職員には、目的を明確にして協力を要請する
- 他校の栄養教諭との横のつながりを作り、校内連携の工夫を共有する

そのほか、食育についての取組は、1教科としての実施ではなく、さまざまな教科の中で食育に関連のある単元で協力することが求められるため、下表を参考に、自校の実情にあわせて学校内で調整していくことが求められる。

図表 3-34 事業の中で取組のあった、食育に関連する教科・単元一覧(小学校)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	共通
社会			市の様子 働く人と私たちの暮らし (畑、工場) 古い道具と昔の暮らし	水はどこから ごみの処理と利用/ごみ はどこへ わたしたちの県 特色ある地域の人々の暮 らし	わたしたちの生活と食料 生産(暮らしを支える食料 生産・米作り・水産業) これからの食料生産と私 たち	米作りの村から古墳の国 へ 貴族の食事 武士の食事	
理科			植物をそだてよう	季節と生き物 私たちの体と運動	生命のつながり ものの溶け方	植物の成長 からだのはたらき 生きものと養分	
生活	花や野菜を育てよう/やさ いをそだてよう 収穫祭をしよう あきさがし	花や野菜を育てよう/やさ いをそだてよう 収穫祭をしよう/秋の収穫					
家庭					はじめてみようクッキング 食べて元気に(五大栄養 素等)	いためてつくろう朝食のお かず くふうしようおいしい食事	
体育(保健)			毎日の生活と健康	育ちゆく体とわたし	けがの防止	病気の起こり方 生活習慣病の予防 喫煙・飲酒の害 薬物乱用の害と健康	
書写	正しい姿勢・鉛筆の持ち方						
算数		水のかさ			分数・割合	体積・量の単位	
国語	おむすびころりん 大きなかぶ くじらぐも	スイミー	すがたをかえる大豆				
道徳							「いただきます」ということ もったいないばあさん 食品ロス「ろすのん」 いのちのまつり
外国語			What's this?	I like ...	I like apples, what do you like? What do you want?		
総合的な学 習の時間			地域を調べよう 栽培活動	地域まるごと大百科 栽培活動	水質検査 栽培活動	地域の宝物を探ろう 栽培活動	

図表 3-35 事業の中で取組のあった、食育に関連する教科・単元一覧(中学校)

	1年	2年	3年	共通
社会	世界各地の人々の生活と環境 世界の農業 日本の農業・林業・漁業	日本のさまざまな地域 世界をめぐる食べ物 日本の自然環境	地球社会とわたしたち 食生活の変化 わたしたちの生活と文化	
理科	植物の生活と種類	動物の生活と生物の進化	自然界のつりあい 自然と人間 生命の連続性 自然のなかの生物	
技術・家庭	食生活と栄養 献立作りと食品の選択 調理と食文化 栽培の基礎知識 苗の植え付け	地域の食材と食文化 私たちの食生活 私たちの消費生活と環境	幼児の生活と家族	食生活と自立 (1)中学生の食生活と栄養 (2)日常食の献立と食品の選び方 (3)日常食の調理と地域の食文化
保健体育	体の発育・発達	心と体のかかわり 水とわたしたちの生活	健康な食生活と病気の予防 休養と健康 生活習慣病とその予防 喫煙と健康 飲酒と健康	消費エネルギー量測定 体づくり運動
道徳	野菜、食べていますか？ 「いただきます」から始めよう			生命尊重 家族愛 思いやり・感謝 郷土愛
総合的な学習の時間	ふるさとの特産物・産業	職場体験	郷土について考える	ふるさとを知る(自然・産業・福祉・特産物・食・伝統文化) 職場体験 職業講話

4. おわりに

本調査研究では、「つながる食育推進事業」を行っている実施校の取組概要調査、栄養教諭アンケート、実施校のうち一部の学校へのヒアリング調査、及び事前・事後アンケートを実施した。これらの各種調査結果をもとに、「つながる食育推進事業」における事業の効果等を把握した上で、全国に普及啓発する方策についても検討を行った。その結果得られた方向性について、以下のとおり総括する。

4.1 「つながる食育推進事業」による効果

事前・事後アンケートの結果を中心に、今年度の「つながる食育推進事業」の取組による効果を検証した。

まず、事前・事後アンケートにおける食に関する意識に関する各項目（栄養バランス、咀嚼、食事マナー、伝統的な食文化や行事食）に関連する取組を、すべての学年を対象に行った学校・特定の学年又はその他の児童生徒を対象に行った学校・取組を行っていない学校に分類し、取組度合いによって食に関する意識の変化に差があるかを分析した。その結果いずれの項目でも、すべての学年の児童生徒を対象に取組を行った学校においては、取組後に食に関する意識が改善しているという結果が得られた。

また、児童生徒の食習慣の改善がみられた学校とそうでない学校に分類し、改善の有無で食への意識に差があるかを分析したところ、食習慣の改善がみられた学校では、食への意識についても取組前と比べ、取組後に改善がみられる傾向があった。

さらに、教師を対象とした事後アンケートの結果を得点化して学校ごとに分類したところ、教師アンケートで得点が高い学校で児童生徒の食に関する意識が高い傾向にあり、さらに取組後に改善がみられる項目が多かった。

最後に、児童生徒の食に関する意識と食習慣（朝食摂取、共食、主食・主菜・副菜をそろえた食事）との関連を分析したところ、意識がととも高い児童生徒では望ましい食習慣が形成されており、さらにいずれの項目においても取組後に改善がみられた。

以上の分析より、実施校における取組が一定の効果を生んでいる結果が確認できた。

4.2 普及方策の検討

「つながる食育」の取組を普及啓発させるためには、児童生徒にとって生活の主たる場である学校・家庭・地域が一体となって児童生徒を支えることで、児童生徒自身の意識・行動の変容を促すことが重要である。

また、取組を進めていく際には、PDCAサイクルを意識しながら、「つながる食育事業」の2つの目的（食に関する自己管理能力の育成、栄養教諭の資質向上）に基づいた企画設計、現状・課題を踏まえた目標や評価指標の設定、教科等横断的な視点でのカリキュラム・マネジメント、行政・校内推進体制の確立と家庭・地域等との連携、栄養教諭を中核とした全校体制による指導・評価、取組の前後の数値的な評価、体験活動と学びとの関連付け、といったポイントに留意する必要がある。

本報告書では、朝食欠食を中心に、栄養バランスへの意識や地域とのつながり等の実施校独自の課題と取組について、具体的な進め方や効果等を紹介した。実施校以外の学校の栄養教諭等が同様の授業に取り組みもうと考えたときに、参考になることを期待したい。

4.3 その他

実施校へのアンケート、ヒアリング等を通して、各学校の現状・課題に照らし合わせて目標を設定し、さまざまな取組を進めていることが分かった。特に、事前・事後アンケート以外の独自指標を設定している学校では、指標の設定・測定・評価において、工夫をしている学校が多くみられた。例えば、山口県宇部市立琴芝小学校・船木小学校では、減塩を目標として定め、「塩分の多い料理を控えるように心がけている児童の割合」という指標を設定し、取組後にこの割合が上昇するという成果がみられた。このほか、石川県七尾市立七尾東部中学校では、カルシウム摂取量の改善を目標として定め、自己チェック表によるカルシウムの推定摂取量という指標を設定し、取組後に推定摂取量が改善するという成果がみられている。

各学校が取組当初に作成していた事業計画書において、指標や目標値を設定している学校では、成果が表れていることも多く、取組を開始する段階で、いかに取組後を見据えて目標や指標を設定するかが重要と考えられる。